幕末維新期加賀藩 下層藩士文人「亥軒」永山平太の書き物と文人交流

杉　仁

はじめに

幕末の加賀藩　幕末文久期以降、尊王か佐幕か、藩論のゆれうごきは大きかった。

加賀藩は、石高最大とみなされるだけに、幕府諸藩から注目され、内外の波紋は大きかった。藩内対立は激しく、ゆれうごくたびに多くの処罰者や屠腹者、さらには処刑者も出している。

藩校「明倫堂」教職方の藩士文人も、ときに登用、ときには罷免、藩論の変化に翻弄されつづけた。尊皇を論じ、佐幕を論じ、上書を呈し、屠腹者に追悼詩や追悼文を捧げるなど、漢詩や漢翰ほか多くの書き物をのこした。

ここではその一人、下層藩士文人「亥軒」永山平太（文化一二（一八一五）年～明治一二（一八七九）年、享年六五歳）の書き物と文人交流をみる（紙数上別稿に「亥軒」の思想」を準備中）[1]。

「亥軒」永山平太　生涯の事績は、『金澤墓誌』が簡潔にまとめる（原漢文ヵ。仮名まじり読下しのまま。ルビ・句読点等は引用者）。以下のとおり。

永山平太（後割乙一一四八　野田山墓地現存）／平太、諱は平、字は政勝、亥軒　椿園皆其号なり。少時西坂成庵等に学び、後江戸に抵り安積艮斎に師事し、佐久間象山等と友と□善し、帰りて徒に授く。尋で藩校明倫堂の講官となる。文久中、藩主斉泰京師に朝覲し[2]、亥軒此に従ふ。屢朝紳に講し、尊攘の説に就て其志を言ふ。会々讒せられ[3]、藩に帰り、譴を獲て錮（塾居）せらる。慶応の初、貢士に選まれ、集議院に待詔し、

献替する所多し。免されて帰り、権少属文学教師となる。明治十二年八月、歿す。享年六十五。著す所、椿園詩鈔、亥軒文抄、填移小議等あり[4]。

『填移小議』は、亥軒唯一のまとまった著述である。自序「弘化(三年)丙午秋七月」。上巻二十三丁、下巻二十一丁、全四十四丁におよぶ(写本。金沢市立図書館所蔵「加越能文庫」)。

内容は政治論で、「国体(上下)・士(上中下)・農(上中下)・人君・学校(上下)・交鈔・海防・武技(上下)」の章をたてる。「諸事に渉る、縷々数千言、立論公正、條理明晰、皆用ゆべし」(『郷史』)と評される。後述する。

足軽文人としての亥軒　表題は「下層藩士」としたが、正確には最下層と記すべき足軽の出身。『先祖由緒并一類附帳』(「加越能文庫」。以下『先祖由緒』)では、「実者定番御歩 岸故平馬嫡子ニ御座候処、平馬先祖之節、聞番組足軽 永山市次郎養子ニ罷成、文政十二年七月、聞番役足軽ニ被召抱、御切米弐拾俵被下」と記す[5]。のち漢詩「奉寄艮斎先生」でも、冒頭「我生賤且貧」と詠う(後述)。

天保五年(後述の明倫堂入学の年)には「景徳院(正妻徳川家斉娘溶)守殿附定役留書」

（書記）、嘉永六年には「割場附足軽小頭」に任命され「切米三拾俵」へ。安政三年には「学事厚心懸致出精」で文章にも精通、「明倫堂欽定四経考異御用手伝」任命（後述）で「参拾五俵」へ。まもなく「明倫堂二七之講書」役で「助教」、文久三年から数年の閉門蟄居（子孫家に「頑固者」で「閉門蟄居」との伝承あり）をへて許され、維新政府の「貢士」に任じられて新知六十石。免じられて「明倫堂助教加人」、明治二年「三等上士」、同四月「三等文学教師」、同十一月「権少属漢学教師」へ。最終的には石高「給禄高四拾七俵四升八合」で終わる（亥軒写真は『郷史』所載）。

足軽上がりの微禄ながら、藩儒としてわずかながらも着実に昇進しつづけたことになる。

学問精進の人であったか。

Ⅰ．「亥軒」永山平太の学問形成

1、藩士文人「亥軒」永山平太とその書き物

亥軒の書き物　書き物および事績書で確認できたものは、以下のとおり（刊写時代順。①～③は近世資料館塩川隆文氏の教示を得た。謝意を呈する）。

①『亥軒雑抄』天保癸卯（ママ 癸巳カ）（四年）～嘉永巳酉（二年）、覚書綴じ八冊（全二十四冊カ）、［金沢市立近世資料館］［岸文庫］。

②『亥軒詩軸』年記なし、［同前岸文庫］。

③『填移小議』嘉永三年七月自序［加越能文庫 特1635-3］。

④『永山亥軒上書』上書九点（嘉永六年～慶応四年）、附伺留鈔録六点（文久三年～慶応四年）［加越能文庫 M135標］。

〈1〉「存寄之覚書　嘉永六年二月」、

〈2〉「蝦夷地之像ニ付見込書　安政二年十一月」、

〈3〉「建白書稿　文久二年七月」、

〈4〉「御上京ニ付心附之趣言上　文久三年正月」、

〈5〉「御上京之節御御内御用一件草稿」、

〈6〉「太政官より御下問徳川家ニ付相続方上書并軍備等三ヶ条上書　明治元年五月」、

〈7〉「擬黄門老公上書」、

〈8〉「宇多天皇以来之御諡号改変ヲ請フ議　明治八年三月」、

〈9〉「男女混同教授停止ヲ請フ議」（上書については別稿）。

⑤『先祖由緒并一類附帳』明治三年　永山平太（永山氏六世之祖父より子の代までの由緒、および実家岸氏祖父より甥姪従兄弟までの附帳）［金沢市立図書館近世史料館 帳411］。

⑥全六点合冊。

(1)『永山平太由緒帳抄』（⑤由緒帳。亥軒条の抄録）。

(2)『長春園雑記十一ノ抄／永山平太』（雑の原文は襍。『栄辱雑記』記載による⑥由緒帳の補訂三条）、

(3)『亥軒先生碑陰記』安達敬之、

(4)『長春園犬襍記十三ノ抄／亥軒先生行状』明治十九年 石崎謙（以下『⑥行状』）、

(5)『亥軒履歴』明治十九年 岸秀実（亥軒長子 岸氏後嗣）の石崎謙宛訂正書簡（以下『⑥履歴』）、

(6)『亥軒履歴再報』同年、（同前再訂正書簡）（以下『⑥履歴再報』）。

以上全六点合冊［加越能文庫特1］［634／172］。

⑦『西荘遺稿／永山亥軒先生行状』松村敬之（称精一郎号西荘、福光人。『⑥行状』と一部異なる。以下『⑦行状』）、石崎謙の跋（明治三十四年）および頭注補訂付き［加越能文庫特163+171］、［加越能文庫5530標］。

⑧『明治三十八家絶句』全三冊、明治四年刊（上巻三人目「亥軒十五首」所収、［国会図書館］［ZYDYDM0001126］）。

⑨『聯珠合璧』、『椿園詩鈔』と『新川詩鈔』の合冊、明治十二年刊［国会図書館］［ZYDYDM0001350］。

⑩『続亥軒文鈔』明治十七年（甲午）二月跋写本。四編以外は⑪『亥軒文稿』と重複［京都大学図書館西村文庫四・〇五・ゾ一］。

⑪『亥軒文稿』永山鉄太郎（岸秀実長子 永山氏後嗣）編、明治三九年刊、［見返］「亥軒遺稿」第一冊、巻之一33丁、巻之二37丁、第一冊（以下『文稿』）。

⑫『亥軒詩稿』同上第二冊、20丁、⑩～⑫は［国会図書館］［ZYDYDM0001284］。

⑬『金沢墓誌』大正八年刊、野田山の墓誌または小伝を収録［国会図書館マイク］［D105-H-373-316］。

⑭『郷史談叢』和田文次郎著、大正一〇年刊（原漢文は読下しで掲載）［国会図書館マイク］［ZYDYD5-H-398-6］（以下『郷史』）。

⑮『金沢市教育史稿』大正八年刊、複刻版昭和五七年［早大図書館］［ト02 033391］。

⑯『三州遺事』黒木植著、石川県立図書館一九三一年［早大図書館ヌ5-1807］。

⑰『石川県史』石川県一九二七～三三年［早大図書館］［1-57-H335］。

確実な原本史料は①～⑤のみで、『加賀藩史料』の言及も少ない。⑥～⑫は後人による編纂物。⑬～⑰にはあきらかな誤記や誤植もある。『行状』も、⑥と⑦で異なる箇所がある。

⑭『郷史談叢』がもっとも詳しく、亥軒上書なども引用するが、出典を明記しない。亥軒の項の表題は、「永山亥軒　明体適用の学を為し尊王攘夷の議を建つ」とある。「明体適用之学」については後述する。

以下、これまで流布した地元諸書⑬～⑰の記述を、①

〜⑤および⑥〜⑫で正しながら、幕末維新期の激動を生きぬいた一下層藩士文人の実態をあきらかにしたい。

亥軒の出自と人となり　『⑤由緒帳』および⑥⑦の『行状』によれば、「亥軒」永山平太（以下亥軒）、諱は平、字は政時、号は亥軒 椿園、通称平八のち平太。本姓は岸氏で代々農を業（状）（⑦行）としたが、最下級の足軽「永山氏」の養子となった父「平馬」の子として、文化十二（一八一五）年八月十五日「石阪（ママ）五十人街」（五十坪単位の足軽長屋街か。『郷史』記述とは異なる）に誕生（庭の椿による。号「椿園」）、文政十二年に永山氏を嗣いだとされる（満十四才『⑥亥軒履歴再報』）。

『郷史』は、「幼にして異稟…、尤も読書を嗜む」とし、八歳のある夜、「講談師が太閤記を講ずるを聞き、翌日其聞く所を筆にし以て人に示」したが、「叙述明断、文理井然（整然）」で大人をおどろかせたとの伝承を記す（⑧行状による記述）。

その人となりについては、「亥軒人と爲り、躯幹短小、気宇峻峭、性亦耿介にして至誠惻怛、常に国家生民を憂ひ、迎合を屑（いさぎよ）しとせず、坎坷（かんか）（世にいれられないこと）志を齎（もたら）して以て世を終へぬ」（読下し原文のまま）とする。

体躯小柄だが心はきびしく、常に国家と民を憂い、節操堅固で人に迎合せず、俗世を越えた頑固堅物で世に容れられぬまま亡くなった、というのである。子孫にも「頑固者だった」との伝承がある。

亥軒の学問形成と師「西坂成庵」　天保五年、二十歳で藩校「明倫堂」に入学、藩儒「大島柴垣」や「西坂成庵」に師事、天保九年、二十四歳で江戸「昌平黌」へ遊学した（安積艮斎入門等は後述）。

師「成庵」西坂錫については、『亥軒文稿』に二篇、「送西坂成庵先生祇役江都序」と「西坂先生行状補遺」をおさめる。前者は、「才学ノ淵懿…、憂世ノ深志。期望之遠大」なる西坂先生のお蔭で、「平（亥軒）、甲午（天保五年）之歳ヨリ昌平黌舎」に学んで多くを理解できた、としてその学をたたえる（原漢文。カナ混り読み下し文はすべて引用者。以下おなじ）。

後者では「先生、始メ学ヲ友田先生（彦助カ）ニ受ク。国学生員ニ爲ルニ及ビ、則チ大島贄川先生（大島柴垣の父）ニ師事ス」とし、「大島柴垣先生」をついで藩校明倫堂の総裁となったことを称える。

また水上一久「昌平黌に遊学せる加賀藩士」（「北陸史学」第九号一九六〇年）は、西坂成庵遺稿『三楽楼遺稿』（未詳）をとりあげ、亥軒撰の「西坂成庵遺稿跋」を引用する。亥軒は、成庵門下で重きをなす一人だったらしい。「甲午（天保五年）之夏、余在江戸、執業（西坂）夢錫先生、先生講談之次、毎及朋友信義之事」と

書き出し、末尾「天保（十一年）庚子冬十一月　永山平　謹跋」でむすぶ。亥軒は、昌平黌でも成庵に学んでいたのである。

亥軒の儒学系統は、まず朱子学であり、仁斎学にもめくばりしていたらしい。亥軒の覚書綴じ『亥軒雑抄』二（全八冊。金沢市立近世資料館。岸文庫）に、「読書分年日程」として「朱子読書法六条」「読書法」「学文之法」のほか、「仁斎日札」もおさめる。また「（佐藤）一斎先生与清人所筆談也」とする「崎陽筆語」の筆写もみえる。

おなじく覚書「南北史」について、末尾に「介柴垣先生而得学校官籍読之　癸卯（天保十四年）六月五日□□至廿九日而卒業」と記す。成庵の師「大島柴垣」にも師事していたことをしめす。

いずれにせよ亥軒の学問は、若年期は藩校明倫堂で、友田先生（彦助カ）～大島贄川（贄川長子）～大島柴垣～西坂成庵の学統につらなり、天保五年二十歳で江戸昌平黌、同九年二十四歳で安積艮斎に入門、さらに学を深めたことになる（後述）。

西垣成庵は、強烈な攘夷論者で知られていた。洋学を学ぶものを、「嗚呼神明之国ニ生レナガラ、而シテ蛮夷戎狄ノ道ヲ信ズル者、其罪固ク誹ヲ容レザラン矣」、あるいは、「平素目ニ神聖之書読ミナガラ、口ニ忠孝ヲ唱エ仁義ヲ称シ、而テ蛮夷戎狄之強大ヲ説ク、而テ天下ヲ惑乱サセル者、ソノ罪奈如哉」などを強調していた（『石川県史』所引『華東十弁』安政五年）。

亥軒の対外意識への影響も大きかったであろう（対外意識は別稿）。

2．亥軒の学問傾向「明体適用之学」

『填移小議』序文にみる　『填移小議』（上下一巻）は、唯一のまとまった著述である。亥軒の思想営為をみる上で、重要な言及をふくむ。

『填移小議』序文は、亥軒の学問観～修行観～現実観を宣言する姿勢をみせる。内容項目は、「国体（上下）、士（上中下）、農（上中下）、人君（全二丁）、学校（上下）、交鈔（全四丁）、海防（全五丁）、武技（上下）」で、亥軒が何に比重を置きながら現実実践を重視しようとしたか、その一端をうかがわせる（内容詳細および亥軒上書をあわせた思想傾向は別稿）。

序文は冒頭、「古ノ学者」の理想とすべき姿勢をまとめ、「…古之学者、独リ経明行修ノミナラズ、亦能ク治体（政治体制）ヲ明ニス。適（たまたま）、世ニ於テ論語中ノ所載ヲ用ウ。政ヲ問イ、

邦ヲ為スヲ問ウガ如シ。以テ見ル可シ矣」とする。

昔の学者は、学問修行のみならず、政治実践を重んじた…、ひろく「論語」の言によって政治と邦国のあり方を考えてきたとして、納得の意をしめす。そのうえで一転、現実をみてこう批判する。

「今ノ学者、此ニ異リ、其経義ヲ談ズルヤ、繭絲ヲ分ケ、牛毛ヲ剖クト雖モ、而テ事業ノ施ニ及ブ、則チ茫乎トシテ措スル所ヲ知ラズ。往々ニシテ俗吏ト為リ、嗤笑サルル所ノ者、比々皆是、是ノ如キハ豈是、孔門之罪人タラザランヤ…」。

今の世の学者は経書の細部にこだわるだけで、現実の事業は漠然としている…、「俗吏」として嘲笑されるのは、儒学を学びながら儒学の罪人「孔門之罪人」になっているからではないか…。現実を忘れているとの批判である。

亥軒の「明体適用之学」　そのうえで、亥軒みずからの学問の立場を、「明体適用之学」だと明言する。

「明体適用之学為ラント欲ス。故ニ研経ノ暇ニ心ヲ国家之制度ニ留メ、此ニ年有リ矣。則チ論著一篇以ヲ以テ筐底ニ蔵シ、歳月之久。…以テ諸師友ニ質ス。各、論評有リ」とする。

「明体適用之学」をめざし、経書の学習の暇、いわば理論の合間に、現実の「国家之制度」を心にとめ、一書をなしたのが『填移小議』で、永年筐に秘していたが、このたび師友たちの閲覧と「論評」を得た、というのである。亥軒の「明体適用之学」は、独学による観がある。

亥軒がめざした「明体適用之学」とはなにか。儒学の諸動向のなかに、どのように位置づけられるのか。

中国儒学史では、「明体適用之学」は、清代の学者「李雛」号「二曲」（一六二七～一七〇五）が唱道した論で、「明体（道徳）と適用（経済）が共に実践されて始めて真の学問である…」との意だと説明される（「李二曲思想シンポジウム」開催趣旨　二〇一〇年）。

「李雛」は、「陽明学の影響を強く受け、明代の庶民学者を顕彰し、人間主体を確立して実践することを尊ぶ「明体適用の学」を提唱、「明代の心学的性格を残しながら、政治社会的実践を重んずる清代初期の学風をあわせもっている」とされる（佐野公治『日本大百科全書』）。

また、「劉念台・李二曲の両者は、朱子学・陽明学に対して一定の距離をおいて公平にみた人で…、陽明学に…好意的であったとはいえ、全面的賛同を吐露した人ではなかった…」ともされる（吉田公平「王陽明の思想、体認を巡って」）。

いわば、朱陽どちらにも組せず、それぞれの理論をふまえた上で、自らの実践に即して採るべきをとる…。朱陽折衷の実践派ともいうべき独立の動きといえよう。

朱陽折衷の独立実践派　日本の儒学研究は、いわゆる朱子派学～陽明学派～折衷学派などの三分類にとらわれると、ありのままの実態がみえなくなる。

たとえば大塩平八郎は、だれもが「陽明学者」に分類するが、亥軒と似た論旨で「明体適用之学」の語句を使い、世の学者を批判する。『洗心洞箚記』（天保四年序）では、「学ヲ論ジ道ヲ明ラカニシ、而モ其ノ用無キ者ハ、スナワチ天ニ背ク。…所謂異端ノ教ニシテ、聖人ノ明体適用之学ト云ワンヤ」とする（訓読は『日本思想体系』四六では「体ヲ明ラカニシ用ニ適スルノ学」）。

学を論じ道を明らかにしても、「用」実用を重んじない者は「天ニ背ク、…異端ノ教」で、聖人の「明体適用之学」に反するとの論旨だが、亥軒の「孔門之罪人」の言い方に通じる。

大塩も亥軒も、似た姿勢で「明体適用之学」の語句を使うわけだが、これをもって亥軒を大塩とおなじ陽明学派と規定したら、実態はみえなくなる。

在村では、さきの「劉念台」を、「（朱陽）両造聴断、調停和融」した人として重んずる「池田草庵」（但馬宿南の私塾師匠）がいる。「明体適用之学」の語は使わないが、みずからも諸藩の招聘は固辞、時々の上書および、私塾と養老会の地域実践を重んじる姿勢をつらぬき、在村漢学者に徹する一生を送った。

草庵は、朱子学は物の理と誠の道をあきらかにしたが、理論に走りすぎてきわめて難解、分派して支離滅裂の弊害をもたらした、と批判する。陽明学は簡易直截だが「心」を重んじすぎて自信過剰、自侭に走り猖狂自恣の病弊をもたらした、と批判する。

朱陽双方を批判した上で、「衆論紛然」のなか、「両造聴断、調停和融」して至当の要諦をえたのが、唯一劉子のみとだして、高く評価する。

劉子も草庵も、朱子の難解さと王陽明の自侭さを、理論に走りすぎたゆえだとして批判しながら、現実の実践（劉子は明末清初の激動草庵は幕末維新の激動）に徹することで、みずからの儒学を深めたことになる。まさに「朱陽折衷の独立実践派」といえよう。

後述の亥軒の友、「倉石子緝」も似ている。「高田ノ諸儒ハ陋守」で朱熹「四書集註」や「近思録」に固執するなか、私塾「済美堂」では、「君、独リ博ク元明諸家ノ説」

も併せ講じるので「異学」と疑われた、というのである（『桐窩倉石君碑』）。

いずれも近世後期、三都も在村もふくめ、各地にあらわれる日本儒学諸派の実態である。これまでのように、純粋朱子学を軸とし、これを批判する動きを、陽明学派あるいは古学派または折衷学派として片付けるだけでは、実態にあわない。

在村もふくめた地方漢学者の、「折衷独立実践派」とでもよぶべき存在を考慮する必要がある[6]。

いずれにせよ亥軒のいう「明体適用之学」は、朱子学と陽明学どちらにも組せず、人の本質たる道徳修養と、現実作用たる現実実践の、緊密な一体化を重視する「朱陽折衷の実践派」の一つ、一般からは「異学」ともみなされ得る、独自の立場を表現するものであった。

亥軒も一般からは、陽明学寄りの「異学」と疑われていた、とも考えられる。

こうした亥軒の学問傾向は、江戸遊学でつちかわれたはずである。つぎに、亥軒の江戸遊学のようすをみたい。

Ⅱ．亥軒の江戸遊学と師友

1．安積艮斎塾入門と「艮斎先生曰」

亥軒の江戸遊学と師友　亥軒の江戸遊学は、年次が諸書で一定しない。

『安積艮斎門人帳』（同題彰会二〇〇七年）には、自筆「加州　永山平太」が明記される。末尾ちかくの丁（三三九頁掲載）だが、末尾には乱丁が多いらしく、安政七年条につづく丁のようにみえる。入塾年は、正確にはつかめない。

自筆の『⑤由緒帳』には、江戸遊学の記載はみえない。『⑥(5)亥軒履歴』は、「…天保五年旧幕臣安積祐助門ニ入リ漢学ヲ学、同年、武術旧幕臣藤川次郎左衛門ニ学フ」とする。『⑥(3)碑陰記』は「天保辛丑」としながら、頭注で「辛丑甲午誤」と訂正する。「甲午」は天保五年となる。

おなじく『⑥(4)

行状』は、「天保十二年、先生二十四歳」としながら、頭注で「天保九年戊戌」と訂正する。『郷史』は、「二十四歳、江戸に祇役し安積艮齋の門に学ぶ」とするが、二十四歳は天保九年となる。

亥軒自筆にもとずくと史料は、後述の『文稿』所収「送倉石子緝序」である。二人の出会いについて、「戊戌之歳、余、安積先生ノ門ニ入ル。始テ倉石子緝ト相見ユ。子緝、乃チ越後ノ人也」とする。「戊戌」は天保九年となる。

この天保九年については、亥軒の親しい交友の一人「栗本匏菴」は、おなじ交友の一人、後述の「倉石子緝」の夭折を追悼する「侗窩倉石君碑」（明治九年）を撰し、「天保九年秋、余始テ艮斎安積先生見山楼ニ就学ス。時ニ越後高田人（子緝）侗窩君、塾長為リ」とする。

亥軒にはふれていないが、亥軒の記す「戊戌之歳」をあわせれば、栗本匏菴と亥軒はおなじ天保九（戊戌）年の入塾で、ともにそこで、塾長だった倉石子緝に初対面したことになる。

以上により、亥軒の江戸遊学と艮斎門入塾の年は、三書が一致する「天保九年」をとることにする。昌平黌入学と艮斎門入塾ともに、「天保九年」だったとしてまちがいあるまい。

亥軒が学んだもの　江戸遊学で亥軒が学んだのは、昌平黌と艮斎門の儒学だけではなかった。

『郷史』は、「亥軒、又明律を清水俊蔵に受け、義例精詣なり。又星暦の学を幕府の日官高橋作右（マヽ左）衛門に受け、推歩（天体運行の推測）に邃（おくぶか）し」とする。『⑦行状』（明治三十四年）の記載、「嘗テ明律ヲ江戸清水俊蔵（兵学者で天文暦数律学にも。くわしい清水赤城のこと）ニ受ケテ義例精詣。従幕府日官高橋氏ニ星学象ヲ学ビ、遂ニ推歩」によると思われる。

しかし、「高橋氏」が「作左衛門景保」のことならば、獄死の年（文政一二年）と合わない（弟の暦学者「渋川景佑」の可能性は未詳。子がいて嗣い。だのか否かも判然としない。誤記か誤伝か。教示を乞う）。

「明律」については、さきの①『亥軒雑抄』三（天保～嘉永年間）に、亥軒が読んだと思われる律学の書目「律書目録」がみえる。前半、「大明律集解」「龍頭律法」など二十九点を並べ、「赤城先生曰、已上 昌平庫之律書也、以下随余所見聞記之」と記してから、後半「唐律疏義」「律例類抄」などを列記する。

「赤城先生」つまり清水赤城が目を通した「昌平庫之律書」および、それ以外の律学書をあわせた目録だが、亥軒が読んだとする「律書」の一覧記録でもあろう。

また亥軒は、「赤城先生」と呼んでいたわけで、他記録にはみえないが、清水赤城を師として、律学を学ぶだけでなく、赤城の専門である兵学も学んでいたことをうかがわせる（赤城の著書に律学はみえないが）。

のち明治元年、貢士を辞しふたたび藩校の「明倫堂助教加人」にもどったとき、「刑律調理方御用」の兼任を命じられている（⑥所収『永山平太由緒帳之抄』ほか）。

藩内での亥軒は、江戸で律学も学び、刑律学に通じている人と目されていたのであろう。

「星学」天文学については、『⑥履歴』が、「一、天文学奥儀ヲ究メシ由ニテ星学写本数十冊有之。平太ノ自筆ナリ。大橋順庵（ママ不明。教示をこう）ノ筆跡モ有之。江戸ニテ学ビシト思ハル」と記す（⑥所収『亥軒履歴』）。また、さきの岸文庫には、「永山平太手写［天球図］」（22、4／38）もあるという（塩川隆文氏教示、未見）。

多くの写本や天球図の手写をのこしたとすれば、「星暦の学」を学んだことは事実とみてよい。さきの『⑦行状』の「日官高橋氏」だけは疑問がのこる（ほか⑥『行状』はすでに死去したはずの梁川星巌会ったと誤記する。夢で拝謁したとする「謁梁川星嵓翁」（『椿園詩鈔』巻頃詩）を誤読したらしい）。

ほか学んだものとして、「一将棊（碁）ハ江戸ニテ初段」（⑥『行状』）とも記す。江戸での亥軒は、ひろく諸学を学び、将棋囲碁まで初段を得るなど、向学心のかたまりだったと考えられる。

安積艮斎への入門と敬意　安積艮斎への入門については、さきのように、「戊戌之歳（一八三八天保九年）、余、安積先生之門ニ入リ」とするが、安積艮斎への敬意は深かった。捧げる詩文も少なくない。まず五言詩「奉寄艮斎先生」を『亥軒詩稿』（永山鉄太郎明治三九年刊［国会図］DM99284）にみよう。

奉寄艮斎先生

我生賤且貧。自分為二学究一。及レ奉二明師誨一。乃知二立レ心陋一。策励雖二更加一。蹇（けん）劣猶仍レ旧。所レ恃薫陶恩。扶レ顛又警レ仆。世路多二枝捂一。人事罕（まれ）二良遘一。恨不レ得執レ鞭。昕夕稟二面授一。遙憶瑤席下。会合一時秀。窓映霞関月。几対房山岫。研レ経探二妙義一。訂レ史決二疑竇一。思之神已往。不レ願衣二文繡一。

冒頭、自分の姿を「我生賤且貧」と詠いだす。亥軒の自己像の謙譲表現の一つであろう。

たしかに江戸遊学の青年期、好学を認められた足軽頭とはいえ、藩士身分の最低位がついてまわる。禄高も最低位で、貧しかったはずある。

その上で、「学究為ラントシテ、明師ノ誨（おしえ）ヲ奉ルニ及

ブ」としながら、師の元で「経ヲ研シテ妙義ヲ探リ、史ヲ訂シテ疑竇ヲ決ス」、経書の意味を知り歴史上の疑念を晴らすことができた、と師を称えている。

「賤且貧」の身ながら、学究たらんとして向学心に燃え、研鑽にはげんだ様子をしめす。

『椿園詩鈔』（題簽＝『聯珠合璧』）でも、艮斎が昌平黌教授に抜擢されたことを言祝ぐ詩が巻頭をかざる。長い題「庚戌（嘉永三年）三月、師艮斎先生、昌平黌教職ニ徴擢。信ヲ得テ喜ブコト甚シク、詩ヲ以テ箋ニ代エ、賀ヲ奉ル」がつく。

艮斎先生の昌平黌教授の抜擢を、詩をもって祝意を奉ずるとし、先生の学はまさに「正ニ濂洛ノ道ヲ承ケ、遠ク洙泗ヲ遡ル」とする。

朱子学を正しく継承し、遠く「洙泗」の孔子の教えに遡るもので、抜擢は遅すぎた…。先生の学問の偉大さを思い、悦びのあまり床に入っても寝付かれない…。外に出て「文昌星ヲ見ルニ、光芒昔日ト異レリ」。学徳を象徴する北斗七星（文昌星は周りの六星）を見上げると、輝きが以前と異なって見えた…。

そう詠いながら、艮斎師の抜擢をたたえたのである。

『亥軒文稿』の「安積艮斎先生曰」　『文稿』（明治三九年序）ではいくつかに、文集の常として、師や敬友に求めた講評を、「□□曰」で添える。

「艮斎先生曰」が全八篇で一番多い。巻一冒頭の「菅公画像記」ほか、「孔子誅二少正卯一弁」、「商鞅論」「介子推論」「楽毅論」「荊軻論」「周亜夫論」など、中国史書の人物を論じたものが多い。

艮斎門で学んでいたときの論文で、艮斎に提出して講評を求めたものか。「師事」する意義の一つは、こうした論評を得るところにあったと考えられる。

つぎに多いのが「大槻磐渓曰」と「清人 蔣子賓曰」の各四篇、ついで「河田屏風曰」と「斎藤子徳曰」の各三篇がみえる。艮斎先生についで亥軒が敬愛していた者たちで、交友の親密度をしめすものでもあろう（いずれも後述）。

「菅公画像記」の「艮斎先生曰」　「安積艮斎先生曰」の書かれ方をみよう。まず『文稿』巻一冒頭の「菅公画像記」（天保庚子十一年）の末尾にみえる。

亥軒文章の内容は、こうである。友人「小川君家蔵菅公画像一幅」は、「款識無クモ、画意ハ渾樸、毫モ粧飾ノ態無キ」名作である…。家蔵すでに「三百年」、このたび祠を建ててこれを安置した。「菅公画像一幅、款識無クモ

画意渾樸、毫モ粧飾ノ態無シ。…名工ノ所作ト知ルベキ也」と書き出す。

菅公を「儒門ノ栄、曠古未ダ嘗テ有ザル所ナリ」と称えながら、「然ルニ終ニ讒人ノ所構ノ為、冤ヲ蒙リ謫居、以テ薨ス」とし、「藤氏擅制」の世となったとする。

つづけて「公ノ薨後、京師屢（しばしば）災変有リ。讒人亦相踵（あいつぎ）テ夭死スルヲ以テ、公ノ為ノ祟（たたり）ト為シ、妖誕ノ説熾起ス、而テ公ノ冤益ス深シ矣」としながら、「天子悔悟シテ其官ヲ復シ、又位ヲ贈リ諡ヲ賜ウ。則チ其ノ冤、白スベキヲ庶幾ス」…。冤罪たることが認められた、と断ずる。

そして「国ヨリ郡ヘ、而テ郷カラ里ヘ、以テ閭閻ニ至ルマデ、祠ヲ建テ賽会シ、尊崇シテ奉祀セザルハ莫シ」としながら、公の生前愛した梅にちなみ、「吾ガ藩ノ俗、相誡シテ毎月念五（廿五日）、梅実ヲ噉セズ。蓋シ公忌日ヲ以テスル故也」などとしながら、歿後一千年をへても「公ノ徳沢、民心ニ入スルコト大ニシテ且ツ深シ」と称えながら、「庚子（天保十一年）八月廿五日謹記。以テ小川君ニ贈ス」と結ぶ（菅公忌日廿五日にあわせたか）。

なお頭注だけだが、「野田笛浦曰、的論不磨」「又曰、小処説出却妙」「又曰、好典故自何威得来」が付される。

「野田笛浦」とも親しかったことをしめす。『文稿』には、こうした頭注だけの短文の「曰」も散見する。

野田笛浦は丹後田辺藩士。文政九年、遠州漂着船の清人筆談録『得泰船筆語』（於清水港カ）で知られ、のち家老として藩政改革に尽力したとされる。外交問題に関心深かったか。

この文章に対する論評「安積艮斎先生曰」は、「菅公ノ冤ヲ雪ギ、忠誠ノ心ヲ明ニス。卓卓、名教ヲ裨（たすく）ル有リ。文藻雄健、議論俊偉、亦甚喜ブベシ」とある。

亥軒文章は雄渾で俊逸、菅公の冤罪をすすいだ…。あるべき忠誠心をあきらかにし、儒教の教えを助けた…。文章雄健、議論俊偉を喜ぶ、というのである。

「右軍草書孝経法帖記」の「艮斎先生曰」　おなじく『文稿』巻之一、「観橘氏所蔵唐搨王右軍草書孝経法帖記」の「艮斎先生曰」をみよう。

まず亥軒は、橋守部氏は国学を善くして臨池（書道）を好み、所蔵の古法帖は「無慮数百、皆尋常凡庸ノ帖ニアラズ」とする。

なかでも「唐搨王右軍（王羲之の官名）草書孝経ヲ推シテ第一ト爲ス。余コレヲ耳ニシテ久シ」かったが、「辛亥（嘉永四年）之夏、

二三同志ト胥謀シ、人ニ託シテ欽慕之意」を伝え、見ることができたとしながら、亥軒独自の見方を展開する。

「字体ハ指大ノ如ク、温雅淳厚、韻度高絶、渾圓ニシテ圭稜（尖った角）無ク、藹然（おだやか）トシテ犯スベカラザルノ趣有リ。絶品佳帖ト稱スベキ也」と感嘆したとしながら、そこに「先賢学識ノ深遠タルヲ窺」い得たとする。

なぜ「先賢学識ノ深遠」か。「大学格致ノ章ハ、ソノ欠逸伝ル無キヲ以テ朱文公（朱熹）補伝ヲ作」ったものにすぎない…。これを後の学者たちは非難しながらも、その「文章ノ精妙、古文ノ簡奥」は疑おうとはしない…。なぜか。

彼方の朱文公に明解さが在っても、此方には無いからだ…。ちょうど名書家の虞褚（名書家虞世南と欧遂良）たちが、「右軍草書ノ擬ウヲ得テ、而シテ敢テ擬ハズシテ楷字ヲ作」しているのと同じであろう…。

儒学でも書道でも、「大賢ノ爲ス所、ソノ識見、期セズシテ暗合スル」という真理は、「一轍ヲ出ルガ如ク」同一であることを、はじめて体得できた…。この右軍の草書をみて啓発されたことなので併せ記す、とうのである。

書道の「大賢」の書のすばらしさをみて、儒学の「大賢」の識見の高さを再確認したわけで、当否はさておき、何をみても儒学にひきつけて考える亥軒の性癖の、個性的な強さがうかがえる。

これに対する「艮斎曰」は、「右軍此帖、洵（まことに）ニ珍本為リ。此篇ノ発揮明暢タル、殆ド此帖ノ為ニ光華ヲ増セリ」とする。亥軒の論旨の明快さは、この法帖の輝きをいっそう増しているとの褒め言葉である。

「孔子誅少正卯弁」の「艮斎曰」　巻之一の後半、「孔子誅二少正卯一弁」ではどうか。

孔子が司法の職に就て七日目、聞人「少正卯」を五つの罪ありとして誅殺したとの故事だが、わずか『荀子』・『孔子家語』などにのこるのみで、他の経書類にはみえない。

出典への疑念とともに、仁慈を説く儒家たるべき孔子が、刑と罰の法家的な行為をとったとして、後世に多くの論争をまねいたが、その一環ともなりうる文章である。

まず亥軒は、「孔子、少正卯ヲ誅スル、何ゾヤ」と自問し、「曰ク、其ノ罪ノ有ル為也」としながら、「其ノ罪、知得ベキヤ」と再問して、曰く「知ベカラザル也」とする。少正卯の五つの罪そのものは、具体的には知り得ない…。なぜか。論理的にととのった文章ではないが、「然

シテ其ノ人、必ズヤ大奸極悪タルハ国中ニ昭昭タル有リ」とする。

にもかかわらず、「直チニ執テ之ヲ誅ス」というやり方は、「桀紂ノ爲ス所、豈、聖人ノ刑ヲ愼ムノ意ナランヤ」と疑問を呈し、「家語ノ載セル所、何ヲ以テ是ニ異ルヤ」とする。

『家語』の記述は、暴虐な君主「桀」や「紂」のやり方であって、ほんらい刑を慎むべき「聖人」の方法ではなかろう、というのである。亥軒は、『家語』の記載そのものを、半ば疑ったことになる。

これに対する「艮斎曰」は、頭註で「波瀾頓挫之法、頗能領解。可喜可喜」、通説を頓挫させる論法はよく了解でき、まことに喜ぶべきだ、としながら、末尾の艮斎曰でも、「此篇、当時ノ情状ヲ揣摩(推測)スルニ、燃犀シテ(見抜いて)怪ヲ照スガ如シ。姦慝ノ隠(よこしまはらのそこ)、衷ハ悉ク現ル。筆鋒亦甚鋭ニシテ、句句ニ風霜ノ気(きびしさ)有リ」と、亥軒文章をたたえる。

しかし一転、「但シ少正卯ヲ誅スル事、諸経及ビ春秋内外伝ハ皆載セズ。唯荀子孔子家語ノミ之ヲ載ス。其ノ事疑ウベシ。齊東野人ノ語にアラザルヲ得ンヤ」とする。

少正卯の出来事を載せるのは『荀子』と『孔子家語』のみで、ほかの経書や春秋の内外伝(『春秋』の解説書『左氏伝』ほか)にも記述がない…。孟子の言「コレ君子ノ言ニ非ズ、齊東野人ノ語ナリ」をふまえ、道理を知らぬ者の徒言にすぎないから、「孔子、少正卯ヲ誅ス」は事実そのものを疑うべきだ、というのである。

半ば疑っただけの亥軒の論旨を、根本から疑う立場で批判したのである。評語には褒め言葉が多いのが一般だが、珍しくもここでは批判の語を呈したことになる。

「介子推論」の「艮斎曰」　ついで『文稿』巻之二、「介子推論」での「艮斎曰」はどうか。

介子推は、文公の流離十九年間に同行、飢えたとき自分の股の肉を割いて食に提供したほど忠節だったが、帰国して帝位についた文公の恩賞からはずされ、「之ヲ憤シテ卒(にわか)ニ深山ニ匿」れた…。気付いた文公が介推子を導き出して褒賞するべく、隠れた深山に火を放させたが、隠れたまま焼死した、との故事(『十八史略』)で知られる。

亥軒は、介推子の忠節は「能ク人情ノ行イ難キ所ナリ、…誠ニ忠愛ニ出ズ」ト称えながら一転、介推子の隠棲が恩賞からはずされたことを「憤」した行為だと解釈し、「何

ゾ必シモ賞賚ニ及ザルヲ憤シ、而テ其ノ蹤跡（足跡）ヲ隠サン乎」と、介推子の行動に疑念を呈する。

その上で、「是知ル、推、文公ト険譎相推、詐術相軋。而テ外ノ人ノ知ル及バザル也」…。文公と介推子の間には、余人の知り得ぬ対立や詐術があり、ついに介推子は焼死するに至った…。史家はそれを理解せず、「以テ文公ノ賢」を謂うだけで「功臣ヲ忘」れている…。

後世の人びとは「寒食」（寒中に火気を避けて冷たい食事をとること）の慣習で介推子の焼死を忘れずに憐んでいるとし、「嗚呼、術ノ以テ天下後世ヲ欺クニ足ル、此ノゴトシ」と、史家の話術の虚偽性を歎ずる。

この亥軒文章についての艮斎評語はみじかいが、「亦復（またまた）奇警ニシテ人ヲ駭（おどろか）ス。尤モ能ク議論文体ヲ得ル」とする。たしかに、史家が誰も論じない君臣の対立を推測するところ、思いもよらず鋭い「奇警」となるか（この亥軒の見方の当否、教示を乞う）。

いずれにせよ艮斎門下での学びの一つは、自作文章を師に問うて「評語」を得るところにあったと考えられる。

評語の多くは褒め言葉で飾られるが、ときには批判の言もこめられた。亥軒もしきりに作文をなしては、艮斎先生に評語をもとめていたことになる。

2．亥軒の江戸交友

江戸での交友　先生以外で評語を得た江戸交友をみよう。

⑥『由緒帳抄』所収『碑陰記』は、江戸での交友について、「大槻磐渓　佐久間象山　栗本匏庵等友、相共切磋仰鑽、業乃大進」とする。『郷史』は、「大槻盤渓（ママ磐）　佐久間象山　塩谷宕陰等　諸名流と交り、切磋研鑽して業大に進む居ること数年」とする。

磐渓は『文稿』に評語四ヶ所をのこすが、評語三カ所の「斎藤子徳」、および「河田屏風」（晩年の号「迪斎」で知られる。以下「河田」）もいる。河田については、『文稿』「与二河田屏浦一書」で言及する。

おなじく亥軒「送二倉石子緝一序」が言及する「倉石子緝」（越後高田の人。以下「子緝」）もいる。亥軒とおなじ艮斎門下で、同年入門の「栗本匏庵」とも親しい。

以上をまとめると、亥軒の交友は塩谷宕陰（しおのや）、栗本匏庵（ほうあん）（ともに評語と言及ナシ）、大槻磐渓（評語四ヶ所）、河田屏風（評語三カ所および言及）、佐久間象山（言及返書）、斎藤子徳（評語三カ所）、倉石子緝（言及のみ）となる。評語四カ所の「蒋子賓」もいる。ともに後述する。ほか、さきの頭注だけの「野田笛浦」も数えれば、全九人となる。

まず、評語も言及もない二人、塩谷宕陰と栗本匏庵をみておこう（佐久間象山は後述）。

塩谷宕陰と栗本匏庵　塩谷宕陰（文化六～慶応三年）、諱世弘、字毅侯、号宕陰。著書も多い。のち浜松藩主水野忠邦の藩儒として「天保改革」にあたった、とされる。

弘化三年の著『籌海私議』五篇（『日本海防史料叢書』籌はかりごと）は、「審夷情（上下）」、「修造艦」、「七等（防海五事二策）」、「陸闘」からなり、いわば攘夷海防論である。

弘化四年自序『阿芙蓉彙聞』七巻（鹿児島大学図書館）は、「大本」、「原始」、「禁烟」、「交兵（上中下）」、「徵毖」、「善後」で、アヘン戦争を詳述した書。吉田松陰が読んで攘夷意識をたかめるなど、後述の斎藤子徳『鴉片始末』とともに、幕末の諸動向に大きな影響をあたえた。

「栗本匏庵」（鋤雲）は、幕末の親仏政策をすすめた国際派幕臣文人。函館奉行所では、配下の仏人宣教師「カション Mermet de Cachon」との西洋事情問答書『匏菴十種』をのこした。

重用されてからは、フランス技術による横須賀造船所や製鉄所の建設、およびフランス流陸軍伝習の推進者として、また兵庫開港繰り延べ問題、下関戦争の賠償金問題など、外交難問の交渉役として知られる。

渡仏中に幕府は瓦解、帰国後は隠棲するが、『横浜毎日』や『郵便報知』の主筆として活動、犬養毅・尾崎行雄など、のち立憲政治で活躍する新聞人を育てたことで知られる。

亥軒が江戸遊学で得た交友たちほとんどが、後述の斎藤子徳や佐久間象山もふくめ、海外知識を身につけて幕末維新期を生き抜いた人びと、いわば国際派文人であることに注意したい。

江戸での亥軒は、あえて国際派文人と交友をもとめ、文章を交歓し、『文稿』に多々記録をのこしたことになる。亥軒青年期の思想にはらまれた国際志向がうかがえる（亥軒の国際意識は別稿）。

ついで、『文稿』に評語がみえる大槻磐渓と斎藤子徳をみる。

3．国際派文人としての大槻磐渓と斎藤子徳

大槻磐渓との交友　『文稿』に付された「□□日」で艮斎先生に次いで多いのが、大槻磐渓四ヶ所、ついで斎藤

子徳三ケ所である（四ヶ所の待子寅は後述）。

江戸就学中の亥軒にとってもっとも親しかったと思われるが、二人に直接言及する亥軒の詩文はみえない。交友関係の詳細は不明だが、海外知識が豊かだという共通点がある。

大槻磐渓、仙台藩医の蘭学者「大槻玄沢」の第二子で、昌平黌に学び、のち仙台藩の侍講。西洋砲術への関心から蘭学や欧米史を会得、世界地理や各国史を紹介しながら海防論を説き、ペリー来航時には幕府に開国論を建議するなど、独自の海防論～外交論を説いたことで知られる。

著作も多く、漢詩集等もふくめ今のこる全一三〇余点のうち、海防論や海外事情論は、二〇数点以上にのぼる[7]。戊辰戦争では徹底抗戦を主張、奥羽越列藩同盟をささえたが敗北して投獄、のち許されて東京で文雅に徹した、とされる。

漢詩文界で著名になるが、佐幕系の文人として、新選組の近藤勇・土方歳三顕彰の「殉節両雄之碑」（故幕府新選隊士近藤昌宜土方義豊碑）の撰文に名をのこす。

二人の若年時の天然理心流の剣術習得から、新徴隊～新選組～大政奉還～鳥羽伏見戦をへて、近藤は流山での捕縛と板橋での斬首、そして京都梟首まで、土方は函館戦争での銃丸腹部貫通死までを、それぞれ詳述した上で、「辞曰」（辞賦。一般は「銘曰」）を捧げてこう記す。

「周室（王朝）方（まさ）ニ新タナルモ、天下ノ向慕、猶浅キガゴトシ。商祚（王位）爰ニ革マリテ、人心ノ感慨、未ダ灰トナラズ…」（原漢文）などと刻む。天下の向慕は新王朝（明治天皇）にいまだ浅く、旧主（徳川慶喜）への人心の感慨はいまだ灰消せず…。つまり大槻磐渓は、旧将軍家への思慕と、薩長政府への冷評の意をこめた文章で、近藤土方両雄を称えたことになる[8]。

こうした、内に維新批判を秘めた反骨の佐幕系文人は少なくない。磐渓もその一人であり、亥軒の上書にもその傾向がうかがえる（亥軒上書は別稿）。

『文稿』の評語「磐渓曰」　『文稿』四ヶ所の「磐渓曰」をみよう。艮斎先生の八箇所に次いで多く、亥軒ともっとも親しく交わったみてよかろう。さきの「菅公画像記」「孔子誅少正卯弁」「介推子論」では、「艮斎曰」につづく位置に記される。

まず「菅公画像記」では、「磐渓曰、通遍議論、鮮明周

密。菅公ノ心事ヲ掲出シ、燭照シテ亀卜（きぼく）ノゴトシ。末段ハ眼前（明白な）ノ実事ヲ説キ到リ、言ニ遺漏無ク、人心ノ深ミニ入ル、最モ尊崇ノ体ヲ得ン矣」（以下全原漢文）とする。

「孔子誅二少正卯一弁」では、「必ズヤ其事ノ真偽ヲ究セズシテ、而テ直チニ理ヲ以テ、其ノ是非ヲ断ズ。孟子万章ノ問ニ答ウルガ如シ…」（『万章』は『孟子』の章名の一つ）とする。出典の真偽にとらわれず、「理」のみで少正卯の是非を断じ、孟子の問いに答えているとの意か。さきの艮斎先生とは別の視点からの評語となろう。

亥軒「介子推論」（策略と知略の英雄「傅介子」の論）の「磐渓曰」はどうか。おなじく「艮斎曰」につづけ、「磐渓曰、奇論快論、忽チ読メバ、訐（あば）キテ以テ直ト為ス者ニ似ル。深ク聖人ノ幽ヲ闡（ひら）キ顕ヲ微スル旨ヲ得ル矣。…嗚呼、識見過絶、人ノ牢絡ヲ受ケズ、聖人ノ書ヲ読ム者ニ非ズンバ、其レ孰カ能ク此ヲ与（あずか）ランヤ」と、亥軒の見識をたたえる。

亥軒の個性を、人の影響を受けずに聖人の書を読み解こうとする識見にみたことになる。亥軒の一面をよくしめす。

一方こうした磐渓は、佐久間象山とともに、ナポレオンを詠った詩でも知られる。岩下哲典『江戸のナポレオン伝説』（中公新書一九九九年）は、木活字版『仏蘭西偽帝 那波列翁一代記』（上下二冊、一八五四嘉永七安政元年）所収の磐渓詩「仏（フランス）朗王詞」十二首および前書と、象山詩「題那波列翁（ナポレオン）像」を紹介する。

そのうえで、なぜ幕末文人たちが「那波列翁」を詠うのか…、「英雄と自分を同一化することによって、志士的活動のエネルギー源とするような精神的背景」がみられるとする。

いずれにせよ大槻磐渓は、幕末維新の激動期にあって、はやくから海外事情に堪能であること、志士的活動を志していたこと、戊辰戦での徹底抗戦論、さらには維新後も内に維新批判を秘めた反骨文人であることなど、きわめて個性的な文人の一人だったといえる。

亥軒は、おそらくこうした磐渓をもっとも親しい友の一人とし、「磐渓曰」四ヶ所を『文稿』にのこしたことになる。亥軒の個性を、磐渓に重ね合わせて見ることもできよう。

斎藤子徳との交友　斎藤子徳は、磐渓についで多く三ヶ所「子徳曰」をのこす。はやく弘化年間から海外事情に精通し、著作も多かった。

斎藤子徳は若死にしたためか、一般には知られないが、

地元では、号「斎藤竹堂」でよく知られる。『湧谷町史』と『田尻町史』がくわしい。顕彰会もある。

斎藤子徳、陸前遠田郡涌谷村の人、涌谷伊達藩士の三男、文化十二年生まれ。別称馨（けい）、順治、子徳、号竹堂、茫洋子。天保六年（二十歳）で島蘭園（本草学者増島蘭園カ）に学び、天保十年（二十五歳）ふたたび江戸へ。昌平黌に入り、羽倉簡堂・伊東玄朴らとも親交ふかく、弘化元年に舎長に推されたが病多く、帰郷して嘉永五年に病死、享年三十八歳であった。

著作に『鴉片始末』（天保十五年六月跋）、『蕃史』（嘉永四年二月序）、『洋觚（こ）』（近世漢学者著述目録大成『觚』は名のみで実の無い喩えか）、『藩祖実録』（のち明治十三年刊）等がある（『蛮史』『斎藤子徳略伝』）。ほかに『鴉片考』（弘化元年カ）、『林子平先生伝』もみえる。

早くから対外意識にめざめ、はやくもアヘン戦争終結の翌々年、天保十五年六月跋（十二月改元弘化元年）の『鴉片始末』を刊行している。ほか詩集・紀行・小伝記等ふくめ全五二冊中、海外事情関係は十指におよび、「幕末の先駆者」とみなされる（『日本古典文学辞典』）。磐渓とも親しく、『磐渓文鈔』に子徳跋がみえる。

子徳『鴉片始末』のほか、早くにアヘン戦争にふれた書は、大槻磐渓『呂宋漂流記』弘化二年四月、箕作省吾『坤輿図識』弘化二年四月、嶺田楓江『海外新話』嘉永二年夏があるが、子徳『鴉片始末』がもっとも早い（ほかは教示をこう）。

国会本『鴉片始末』（スイ2012ゆ-ナ-40633 中山久四郎書写）には、尊攘勤王派文人僧「釈月性」（号清狂）の『鴉片始末考異』が綴じ込まれる。月性の勤王詩と抜き身の刀剣をかざす絵姿付きで、象山跋を付す（のち『斎藤竹堂全集』和装一二冊昭和一十四年刊にも）。

月性のほか、吉田松陰が、『鴉片始末』や塩谷宕陰（芥子花・阿片花）『阿芙蓉彙聞』（弘化四年自序）を熟読していたことはよく知られる。いずれも、尊攘派志士を中心とする対外危機の関心にかなう書だったことになる。

さらに子徳は、海外事情を詠う漢詩、「和蘭竹枝四種」と「外国詠史三十首」をのこす。後者では英雄「那波列翁（ナポレオン）」を、「水南水北路縦横、弾丸如レ雨衣襟冷」、「当喚欧羅新世界、一千年外有元年」などと詠う。

また「華聖東（ワシントン）」を「一揮麾得陣堂堂。旗幟精明威武揚」、「自レ古功名不レ易レ居、英雄回レ首即樵漁」などと詠い、割注に「議二定共和政事一、功烈甚赫、…脱然去レ位帰二隠田里一」などとも記す。共和政治を実現した英雄「ワシントン」が、任期を終えてすぐ田園に隠棲したことが潔いとして、とくに印象的だったらしい。

さきの「英雄と自分を同一化」をエネルギー源とする

志士的精神の背景（岩下）は、欧州王政をくずしたナポレオンだけでなく、イギリスの桎梏から独立をみちびいたワシントンにも及んでいたことになる。内に、王政批判と独立意識を内包していたことになろう。

いずれにせよ「竹堂」斎藤子徳は、ペリー来航にさきだつ数年前、天保末～弘化年間から海外情勢につよい関心で著した諸書で、大きな影響をあたえていた。「幕末の先駆者」（『日本古典文学辞典』）との見立ては、正しかろう。

さきの「岸文庫」（亥軒実家岸氏のものか）には、亥軒の手写本と思われる斎藤竹堂『鴉片始末』がのこる（岸文庫22・2・4。塩川隆文氏教示）。亥軒の国際意識（別稿）のうけた影響の大きさがうかがえる。

『蕃史』の対外意識　嘉永四年刊『蕃史』みよう。内容は大別三篇。「太古」、「新世界」、「革命」からなる。いわば人類史、世界史、西洋史である。

上巻「太古」は、「亜當（アダム）、天地剖判、始テ男女有リ。亜當（アダム）ト曰、厄韈（イブ）ト曰。波羅第（パラデース）ニ居ル」など、旧約聖書風の人類発生史から説く。中巻「新世界」は、大洪水後に「諾厄（ノア）」らが再生した「第二世界、又曰新世界」の歴史をあてる。

「革命」は、「撒多私（サントス）馬利牙（マリア）」の夢告と「聖子、以テ遂ニ父無クシテ産ス」とするキリスト誕生のことで、それ以降のヨーロッパ史を記す。所々にみずからの論評を入れながら、上巻末尾は、「亜米利屈（アメリコ）」（アメリーゴ・ベスプッチ一四五四～一五一二）らの大航海時代で閉じる。

下巻は一五一四年からはじまり、末尾は一八四〇（天保十一）年、「佛蘭西王、那波列翁（ナポレオン）ヲ改葬、皇帝ノ礼ヲ以テシ、親シク群臣ヲ率ス。…民心大安ス」まで。ここでも那波列翁を、歴史に画期もたらした英雄として評価する。

合間合間の子徳の論評「論曰」では、近年のヨーロッパ諸国の世界侵略拡大の事実を指摘しながら、吾が国だけが国体を保っているとして、こう説く。

「方今西洋有スル所、殆ド宇宙ノ半ニ過ギ、是ノ如クシテ駸駸已（や）マズ。他日併呑囊括シ、鄒孟之言ヲ宇内ニ験スルハ、果シテ彼ニ在ン乎（や）…」、最近の西洋は世界の半ばをこえている…。孟子の言を世界に実現するかのような勢いである。いずれも「陰謀狡計 殺戮戦闘」をもって侵略した結果だが、成功も失敗もあった…。「四大君」といわれた者も、子孫はみな絶えている…。

アメリカや豪州も「西洋ノ号令」に従わず、「叛乱」をおこしている…。どうして西洋が宇内を統一することができようか…（豪州の「叛乱」は一八五四年「ユレーカ砦の反乱」のことか）。

ましてや独り吾邦は、「開闢以来皇統一姓、君臣其位ヲ守リ、敢テ尺寸モ踰越セズ、仁義忠孝ヲ習イ、以テ風ト爲」してきた…。領土も広くはなく、諸帝国も侮ることなかった…。「則チ国体ノ正且ツ強ハ、我ニ若クハ莫シ…」とする。

幕末の緊迫する国際情勢のなかで高まる国家意識は、ひとり「皇統一姓」で独立をたもっている日本こそ正統で、ほかの国の歴史は「蕃史」だとする、一種選民意識に収斂したことになる。亥軒の対外知識も、こうした斎藤子徳の見解に負うところが大きかったと考えられる。

これら一部知識人層にひろがりつつあった皇統意識、および蕃夷に対抗しようとする海防論は、周知のとおり嘉永六年のペリー艦隊の威力の前、幕藩制そのものの動揺に直面する。

皇統意識は、現実の幕藩制の在り方への論議へ、国家規模の政体論へ、さらには尊王攘夷論から尊王倒幕論へ、急展開する。亥軒の対外知識や政体論はどうだったか。別稿で考察したい。

つぎに、亥軒『文稿』に、評語と言及の双方、または言及のみがみえる交友たち、河田屏浦、倉石子緝、佐久間象山をみよう。

4．『亥軒文稿』にみる河田屏浦、倉石子緝、佐久間象山

河田屏浦との交友　まず「河田屏浦」。評語「屏浦曰」と、亥軒「与二河田屏浦一書」がのこる

河田屏浦、正しくは河田屏溆（以下亥軒文の「屏浦」ままで、一八〇六～五九、溆は浦）、字猶興。晩年の号「迪斎（てきさい）」で知られる。林述斎の高弟「佐藤述斎」に師事、のち養子となったとされる[9]。亥軒にとっての屏浦は、さきの大槻磐渓とおなじく、教えを乞うことの多い先輩格だったと思われる。

「屏浦曰」は、さきの「右軍草書法帖」にみえる。「余、此帖ノ奇珍為ルコト聞テ久クシテ、未ダ一目ヲ得ズ。今此篇ヲ読ムニ、委曲詳悉、発揮シテ余ス無ク、人ヲシテ益々（ますます）心魂ヲ飛動セシム。敬服敬服」とある。

話に聞くだけで直接みたわけではないが、亥軒の名文で詳細がよくわかり、心魂飛躍する思いだとして、敬意を捧げていたのである。

『亥軒文稿』の書簡、「与二河田屏浦一書」をみよう。

冒頭の挨拶につづけ、「平、一藩小吏。陋巷ニ生長シ、少小ハ文史ヲ愛スル志有ルト雖モ、夙ニ仕藉ニ上リ、官途ニ齷齪ス。庸才駑劣。一長ノ取ルベキハ無ク」など謙遜しながら、「而シテ大雅、其ノ陋劣ヲ以テセズ。辱クモ容接ヲ賜イ、拙文ヲ評正シ、且ツ高作ヲ投示セリ」など、屏浦から詩文の交歓や評正をうけたことをかえりみながら、屏浦が「浩瀚該博ノ学ヲ以テ已ニ林公ノ講堂ニ処シ、其ノ教督ノ労ヲ代ル」など、屏浦が見込まれて代講になったことをたたえる。

その上で、全国多くの「俊彦英才」「鴻儒碩学」が学ぶなか、貴下が私のような「庸才駑劣ヲ求ル、ソレ何ノ故ナルヤ」と問い、林家が代々天下の文教を司るなか、文才ある者も無き者も、ともに自家薬籠中のものとし教学の助けに援用してきたからであろう…。だから貴下は謙虚にも、私のような拙劣者の愚論に貴重な評語を賜うている…。「教言ヲ賜ウコト幸甚タリ」でむすぶ。

亥軒が屏浦から詩文の高評を得ていることを、謙譲の語意を尽くして感謝した書といえる。亥軒と高位の江戸文人たちとの交流の一端をしめす。

倉石子緝との交友　倉石子緝は、『文稿』に評語はみえないが、亥軒の「送倉石子緝序」（以下子緝）がのこる。艮斎門下の同門生として、したしく交わったらしい。

倉石成憲（文化十二～明治九年）、字子緝、号侗窩、高田城下の商人「倉石甚五郎」の五男。江戸遊学で安積艮斎に入門、清水赤城にも師事して長沼流兵学を学び、帰郷して私塾「済美堂」ひらいた、とされる。

亥軒曰く、「戊戌之歳（一八三八天保九）、余、安積先生ノ門ニ入ル。始テ倉石子緝ト相見ユ。子緝、乃チ越後ノ人也。人ト爲リ気概有リ。尤モ経芸（経書の学術）ニ長ズ。便リテ相与ニ摩切ス。其ノ議論袞袞トシテ聞ク可ク、先生、已ニ之ヲ命シテ諸生ヲ督サシム。則チ其学ノ優タルヤ。奚ゾ余ノ言ヲ籍サン哉」とする。

経書研究に長じ、いつも頼りにして切磋琢磨に励んでいる…、学識の優秀さはいうまでもない…。艮斎先生は塾生を監督する塾長に命じていた、というのである。

子緝の学ぶ兵学については、「好ンデ兵家ノ書ヲ治ム。撃刺坐作、進退之法、以テ攻城野戦ノ術ニ至ル。秘ヲ抽シ精ヲ極メザルハ莫シ」など、孫子ほかの兵家の書を好んだとした上で、世間一般の兵法家は「粗暴ニシテ智数（はかりごと）ヲ任ニシ、道徳仁義ノ説ノ如キ、菅クシテ之ヲ

知ラズ」と批判、子緝に比せば「空文ノミ浮辞ヲ玩ブ者、能ク相抗スル所ナラン哉」などとして切り捨てる。

そして、道徳仁義を旨とする「濂洛ノ正学（朱子学）」をふまえるがゆえに、子緝の講ずるところ「亦一ニ節制ヲ本トス」とし、「其ノ天稟抜俗ノ才ヲ有ルニ非ズヤ。何ゾ能ク是ノ如キ、豈豪傑ノ士ト謂ワザル可ケンヤ」と絶賛する。

亥軒にとって子緝は、「便（たよ）リテ相与ニ摩切（どうか）」する先輩格だったのである。

「侗窩倉石君碑」栗本匏菴撰文　これと別に、子緝には、明治九年の匏菴栗本鯤撰、長三洲書、東久世通禧篆額の「侗窩倉石君碑」がのこる（同名拓本・覆刻本は明治二〇年刊、近代DL-12M14413）。出自、兵学への関心、私塾「済美堂」、宋学一辺倒ではない元明学への目配り、藩儒への登用、勤王論の説諭などを詳述する。

まず二人の出会いについて、「天保九年秋、余、始テ艮斎安積先生ノ見山楼ニ就学ス。時ニ越後高田ノ人（商家生まれ）、侗窩倉石君、塾長為リ」とする。天保九年は亥軒の入門年とおなじ。亥軒・匏菴ともに、入門時すでに塾長だった子緝と出会ったことになる。

その人となりについて匏菴は、「君、余ニ長スルコト六歳、潜思経肯、広ク羣書ニ渉ル。人トナリ厳恪ニシテ犯スベカラズ。儕輩（仲間）、皆畏憚ス」とする。

帰郷してひらいた私塾「済美堂」では、さきにみたように「高田ノ諸儒ハ陋守」、朱熹「四書集註」や「近思録」のみに固執するなか、「君、独リ博ク元明諸家ノ説」も採るので、「異学」と疑われた…。

問われて泰然として曰く、「聖人ノ学、固ヨリ当（まさ）ニ此ノ如シ」と明言、疑うものも深く悟り、「入門スル者陸続、千余人ニ至」った…。藩公「深ク其ノ行誼ヲ尚シ、俸ヲ給シテ学費ニ充テ、ノチ士籍ニ擢列シ、侍講ト為ス。修道館督学ヲ兼ネ、増シテ其俸ヲ給ス」とする。

高田藩は幕末の征長戦争で、慶応二年の第二次に先鋒隊として参加、岩国と広島で敗走し、和議を得て帰藩、佐幕派の中心とみなされ窮地にたたされた。

「藩論岐レテ二ト為リ、少年客気ノ輩、或ハ僧寺ニ会シ、或ハ政堂ニ迫リテ物情騒然」たるなか、子緝は夜陰に門弟たちを招き、勤王たるべきを説諭した。

この国に在って「其ノ土ヲ履ミ、而シテ其ノ粟ヲ食ス。今日乃（すなわ）チ悍然トシテ王師ニ抗セント欲スル乎」と反復して説諭、「連夜鶏鳴ニ達ス」するなか、ようやく「衆、

乃チ服スルニ及ビ、師起ツ」とする。

その結果、「已ニシテ藩政釐革シテ参事以下多ク其門ニ出」ていたので、「闔テ藩、皆勤王トナル。蓋シ君、与リテ力有リ」とする（以上、弛菴碑文）。

門人の多くが藩政にかかわっており、結果として高田藩は佐幕を止め、長岡城攻撃の先導をつとめて戦功をあげた。維新後の立場が守られたのは子緝の説論によるもの、とされたのである。

そして末尾、「藩廃ニ及ビテ君職ヲ辞シテ家居ス。後ニ官、強イテ之ヲ起ル。因テ又就職スルモ、幾バクモ無ク、脚疾ヲ得テ逝ス。実ニ明治九年三月」で結ぶ。

著作二冊もみえるが、『春秋左氏伝集説』が「日本左伝研究著述年表」、『大学集説』は「越佐名家著述目録」によるもので、所在はわからない。学んだ兵法がどのように生かされたかも未詳である。

いずれにせよ亥軒の友「倉石子緝」は、城下町の商家出身で、江戸遊学ののち郷里に私塾「済美堂」をいとなみ、多くの藩士門人をかかえた。やがて藩儒に抜擢されて侍講と藩校督学を兼務、重大時には藩論も動かしながら、病死直前まで活動した人であった。

佐久間象山との交友、「贈永山生」をよむ　佐久間象山も評語はみえないが、「贈永山生」が『象山全集』（巻二「象山浄稿」）にのこる[10]。

『亥軒文稿』「題佐久間象山遺墨」は、往年の交友振りを追想する。象山の非業の死（一八六四文久四年）を伝え聞き、かつて亥軒が贈られた遺墨を前にしての事実上の弔文で、末尾に「蒋子賓曰」（以下「子賓」後述）を付す。

まず象山の「贈永山生」をみよう。「金沢永山生、文才有テ学ヲ好ム。相識リテ未ダ久カラズト雖モ、而テ其予ヲ信ズル甚ダ篤シ。故ニ其求ムニ因リテ言シ、遂ニ書シテ以テ之ヲ勉ム」とする。亥軒が、文才あって学を好み、象山を信頼することきわめて篤いというのは、「題佐久間象山遺墨」とも合致する。

そうした亥軒に、象山が一番言いたかったことはなにか。「学ノ要、其方ヲ得ルニ在リ」だとする。

「方ヲ得ル」の意味がとりにくいが、「方」を「手法」ひろく「方法論」と解すれば、学問の要諦は、学んだ内容をみずからの「手法」で組み立てなおして実践活用する、の意となろうか。

学びの「手法」として活用できるなら、学問の残滓や

些事でさえ、知を開くのに役立つ…。そうでなければ、聖賢の経書や解釈書、史書や諸子の書はかえって有害になる…。そういいながら論旨一転、西洋の学問にも学ぶべきところがある…と説く。

西洋が長じている「物理」を取り入れ、学問の資に役立てるべきだが、いまの学者は、口に儒学の「格物致知」、物の道理をきわめ知力を高めるべきを唱えながら、西洋の物理学を除外している。まさに学びをみずからの「手法」となし得ぬ「知ノ蔽」「識ノ陋」、学問知識の隠蔽と固陋の極だというのである。

のちの象山『省侃言録』（安政元年稿）の言、「東洋道徳、西洋芸術、精粗遺サズ、表裏兼ネ該（そな）エ、因テ以テ民物ヲ沢（うるお）シ、国恩ニ報ズ」（君子有五楽）などもふくめ、西洋学に目覚めた象山らしい論である。

江戸へ出たばかりの亥軒は、金沢での師「西坂成庵」の洋学排斥論の影響がつよかったはずである。まだ知り合って日は浅いが、そうした亥軒の基本姿勢をいち早く見ぬいた上で、西洋学の実践手法を推奨したことになる。

のち、象山を「毎（つね）ニ人ノ意表ニ出ズ」と記した亥軒にとって、文字とおり大きく意表を突かれたことになろう。

この西洋学の推奨に対する亥軒の反応はどうだったか。象山を偲ぶ文章には、明確にはあらわれていない。しかし、別述の「文久二年亥軒上書」では一転、欧米と戦争が起こりそうな現今の情勢下、藩政の改革は必須で、戦艦の購入や航海術の乗船稽古が必要だ…、との論を説く。

象山のすすめた西洋学は、亥軒のなかで組み立て直され、上書に生かされたことになる（亥軒上書は別稿）。

つぎに、亥軒が象山に捧げた文章をみる。

亥軒「題佐久間象山遺墨」をよむ　冒頭、「余、佐久間象山ト江都ニ於イテ相識ル。象山ノ人ト為リ、長身白皙、眼ハ點漆ノ如シ。博ク漢籍ヲ覧ジ、旁洋（かたがた）書ニ通ズ。隷楷ヲ善クシ、弾琴工（たくみ）ニシテ、ソノ談論、鑿鑿トシテ条理有リ。毎（つね）ニ人ノ意表ニ出ズ。乃テ常ニ推服セリ…」とある。

個性的な人品と人相をたたえ、漢籍から洋学まで、楷書や隷書から弾琴まで精通、談論は言葉あざやかて論理正しく、いつも人の意表をこえている…。私亥軒はつねに心服している、というのである。

和歌については、はじめ国雅に長じていることを知らなかったが、あるとき「一日談次（話のついでに）、皇国古音ノ事ニ

及ブ。象山、スナワチ正閏（正統と非正統）ヲ掲示シ、同異ヲ弁晰ス。纚纚タルコト、珠ヲ貫クガ如シ。且ツ其ノ自製スル所ヲ出シテ学歌者ニ勧メ[11]、而シテ之ヲ示ス。意思深醇、含蓄有味。尋常ノ歌学者ノ能ク彷彿セシムル所ニ非ズ。始テ、其ノ皇国古典ニ於テ精究シ、而シテ兼テ国雅ニ於テ長ズルヲ知ル也。乃テ益歎服シ、因テ其ノ歌ヲ請テ帰ル。篋底ニ蔵シ、時ニ出シテ以テ愛玩ス」する。

たまたま話が古代の「古音」、呉音（五～六世紀）以前の古い発音におよんだとき[12]、象山が発音の正閏、正統と非正統を明晰にしめした…。つくる和歌は尋常を超え、日本古典にも精通している…。ますます感歎敬服してその歌を請い、大事に筐の底に仕舞い、ときどき愛玩している…、というのである。

漢籍や洋書、書や弾琴だけでなく、日本古典学に精通していることで、いっそう尊敬をふかめたことになる。

『亥軒遺稿』のなかでも、交友にこれほど言葉を尽くした心服振りは、ほかにみえない。

象山との別れと亥軒の蟄居　こうした交友で、「晨（あさ）ニ夕ニ相会テ、袂ヲ執リ手ヲ握リ、ソノ議論ヲ上下シテ以テ相楽」んでいたが、「豈（あに）図ランヤ殃咎（災難）卒然ト起リ、象山、遽（にわか）ニ禁錮ニ遇ヒテ信濃ニ往」ってしまった…。

亥軒自身も「栄擢ヲ蒙リテ郷里ニ帰」ったので、音信不通になってしまった…。やがて象山は恩赦を得たが、こんどは自分が「厳譴」によって閉門蟄居となった…。ふたたび会うことならぬまま、「嗚呼、象山今逝ケリ。其ノ遺墨ヲ見、其面ヲ猶見テ昔年ヲ憶（おも）」うのみ、とする[13]。

かつてこの遺墨の歌を懐に、象山とともに「橘元輔」を訪れたことがあった…。この歌をみた元輔は、「推賞感服シ、以テ吾儕ノ能ク及ブ所ニ非ズ」と絶賛した…。没後の今、この歌を読み直すと、ふたたび別れる思いだ…、としながら、「疇昔ノ情景ヲ追念シ、感愴（いたみ悲しむ）ニ勝（たえ）エズ。因テ一言ヲ下方ニ記ス」で、この一文をむすぶ[14]。

亥軒と象山との交際は、亥軒文章ではきわめて親密なようすであり、象山文章では、日は浅いが文才と好学の人で、敬信深く交際をもとめる人として描かれる。

若干の温度差があったようすだが、亥軒が佐久間象山と親しく交際したとする諸書の記述の詳細を、原史料で確かめることができた。

いずれにせよ象山との江戸交流は、亥軒の対外観や政治観や学問観の転換に、一つ大きく影響したとみてよか

ろう。

「題佐久間象山遺墨」への「子賓曰」つぎに、付された「子賓曰」をみよう（原漢文）。

まず頭註「蒋子賓曰、軒然大波起」がある。亘軒がこの和歌を乞うて篋底に蔵し、時々出して愛玩していた、との記述への頭註である。「軒然大波起」は、現実の制約を大笑しつつ乗り越えようとする意欲をしめす慣用句と考えられる[15]。

つぎの頭註「又曰、追念曩昔（往時を思い出すこと）ノ両人ノ交情、自ズカラ見ユ」は、「象山…禁錮…、雲山隔離」の叙述への頭註である。現実の制約で絶たれた二人の交情の篤実さがよく表現されている、との賛辞である。

末尾、「蒋子賓曰。一往情深、文ハ疎宕ノ気有リ。腸満脳肥ニ及ビテ轅下ニ局促（ちぢこまる）スル者ト、上下牀ノ別有リ」とある。象山への思いや感情が「一往情深」して深くこもるとともに、細部にこだわらない「疎宕ノ気」豪放で太っ腹の気風がある…、軽挙妄動する「腸満脳肥」（北斉の故事「腸肥脳満」）の輩とは大違い、というのである。

いずれにせよ亘軒と象山との交友の豪傑風の親密さは、亘軒の文章表現ともども、蒋子賓の深い共感を呼んだのである。

以上、亘軒の『由緒帳』や詩文集により、その一生のあらましと、交友関係の詳細を、「蒋子賓曰」もふくめ追ってきたが、そもそも「清人　蒋子賓」とは何者か、なぜ『亘軒文稿』に「蒋子賓曰」が記されるのか。

つぎに「蒋子賓」の実像を追ってみたい。

Ⅲ．亘軒と「清人蒋子賓」の交流

1．「清人蒋子賓」と『蒋子賓詩稿』

『文稿』四ヶ所の「蒋子賓曰」　『文稿』には、「蒋子賓曰」が四ヶ所みえる。さきの**(1)**「菅公画像記」（第十丁）、**(2)**「竹月堂記」（第二十八丁。「吾友岡島修道家園…竹月堂」の記）、**(3)**「孔子誅少正卯弁」（第二十九丁）、前項の**(4)**「題佐久間象山遺墨」（第三十一丁）である。

「艮斎先生曰」八カ所についで、「大槻磐渓曰」と「蒋子賓曰」の四ヶ所が多い。磐渓と同じくらい、親しみと敬意をもっていたことになろう。さきの『⑦行状』も、「清人蒋鴻流（子賓）、瓊浦ニ寓ス。先生ノ文ヲ睹（み）テ、以テ文壇ノ飛将ト目ス」と記す。

亥軒文章がなぜ、「瓊浦」（長崎）に寓する蔣子賓の目に入り、どのようにして賛辞「文壇ノ飛将」がつたわったのか。そもそも二人は、どのようにして知り合い、どのような交流をむすんだのか。

じつは、亥軒と子賓をとりむすぶ「凡山」杏士立なる富山藩士文人がいたのである。後述する。

これと別に、「瓊浦」長崎に寓居する蔣子賓とふかく交際した長崎人がいた。長崎の漢方医「岡田篁所」（穆一八二〇～一九〇三）で、のち明治五年、中国蘇州呉県の蔣子賓書斎を訪れている。

篁所は、蔣子賓（以下子賓）はじめ多くの清国文人や医師・薬舗主と交際をかさね、そのときの紀行『滬呉日記』（明治二四年一月刊）や、筆談記録ものこす。蔣子賓の貴重な記録となる。

はじめに、『滬呉日記』にあらわれる蔣子賓をみておく。

岡田篁所『滬呉日記』の蔣子賓　『滬呉日記』によれば、子賓は「蔣燮鼎」、号子賓、江蘇省呉県の人、のち進士（陳捷氏教示）。『滬呉日記』が冒頭にかかげる日中双方の送別詩にも、「呉県 蔣子賓 燮鼎」とある。[16]

子賓は、ひとかどの文人であった。蔣子賓の肉筆書も、日本にのこるらしい。『滬呉日記』三月十四日条には、「聞閣下学問大進。頃得科挙。萬禧々々」とある。科挙にも合格したらしいが、清国側の公式史料は未詳で（陳捷氏）、大漢和辞典等にもみえない。

『滬呉日記』は、大きく二分される。前半二十七丁は、序につづく最初の八丁が「滬呉日記送辞」。出発時で日本人五人、帰国時で蔣子賓をふくむ清人六人の送辞詩がならぶ。前半は内題「滬呉日記／長崎 篁所岡田穆 清風著」として、初め十九丁が、二月十三日の長崎出港から十五日の上海入港までで、上海での医家や薬舗の訪問記事が多い。

後半、内題「滬呉日記以下係蘇州之游」とする三十九丁は、三月八日の小型川船による上海出港から、三月十一日の蘇州入り、四月十日の下り船「是日火輪船発航」、そして十三日の長崎入港と帰宅までで、「蔣子賓」ほか蘇州文人との交流記事が多い。

篁所は、清人から「先生姓名字号郷貫」を問われると、「姓岡田。名穆。字清風。号篁所。日本長崎県人」と答えるを常とした。日本長崎までの遠さを問われると、「自長崎至上海。海路大凡三千余里。火輪船、経二昼夜即達。其間無大険処」とも答えている。

蔣子賓の書斎訪問と送別詩　『滬呉日記』から、蔣子賓の記録を抜き出してみよう。まず冒頭、篁所への送別詩「滬呉日記送辞」がある。

壬申（明治五年）季春。長崎岡田篁所先生。遊呉門訪余書斎。賦此志喜郎呈。

呉県　蔣燮鼎　子賓　拜草

喜看名紙入門役。引得鄰人観不休。
海外衣冠来上客。画中山水憶前遊。（袖中出画本相示皆長崎名家所作）
十年旧雨清談慣。一巻新詩古蹟捜。（言欲訪呉中諸名勝）
好把錦嚢交付我。流伝佳話遍蘇州。

「呉県　蔣燮鼎　子賓」と名乗っていたこと、篁所が呉県の蔣子賓の書斎を訪ねたこと、海外の上客として迎えられ、長崎での十年来の旧友（旧雨）として清談したこと、二人の出会いが美談として蘇州にひろまったこと、などがうかがえる。蔣子賓は十年来、長崎に往復している文人であった。

この書斎訪問は、篁所が蘇州入りしてすぐ、その所在を蘇州文人らに問うた結果である。

十一日の蘇州入港後すぐ「王正帆　顧駿叔　二家」に到着を知らせ、王正帆と友人の鄭樹庭が舟まで来駕、さっそく王正帆に、「曾来長崎。亦弟所也。他今住蘇州。弟欲一訪。敢問住何処」（「弟」は篁所の謙譲自称）、蔣子賓を一度訪ねたいがどこに住んでいるか、と問うている。

再会中の記述では、「子賓近眼。頗労筆話。人稍通日本語。以故筆話甚少。湯韻侮曰。蔣子賓。即呉縣第三名秀才」とも記す。

子賓が長崎に往来しては篁所を訪れていたこと、篁所は子賓にぜひ会いたいと思っていたこと、極度の近眼で筆談には苦労していること、日本語が通じるので筆談が少なくてすんだこと、文人としての評判は高く呉県第三の「秀才」とみなされていたこと（科挙合格の「秀才」か）、などがわかる。

いずれにせよ蔣子賓は、十年来長崎に往来し、しばしば篁所と日本語で「清談」していたのである。十年来の長崎往来といえば、「清商文人」と呼ぶべき存在であろう[17]。

篁所は、子賓だけでなく、その文人仲間からも詩画の揮毫を得ようとした。子賓に「貴友社中。可嘱詩画人。有幾名位。欲煩先生介揮毫耳」と尋ねている。子賓の答えは、「数人有リ。但シ工（たくみ）ナル者ハ甚ダ少シ」、数人はいるが、たくみなものは少ない、というのである。科挙の「秀才」子賓は、蘇州文人の仲間中で抜群だったことを

しめす。

その文人振りは、国内にのこる蔣子賓の詩集二冊にもうかがえる。

『蔣子賓詩稿』にみる長崎　蔣子賓の詩集二冊は、①『蔣子賓詩稿』（版本一巻。国会詩文二二三三）と②『春雨楼詩稿』（写本一巻。名大文学部図書室 ヴ-II-10）で、ともに年不詳である。詩題は、長崎唐館滞在中のものが多い。

①では、「遊聖福寺」、「唐館題壁」、「天風閣題壁」（天風閣は唐館内の楼閣）など黄檗寺院や唐館、また「長崎島雑詩」など長崎名勝地での詠詩のほか、「望海憶郷」、「春暁」、「旅夜」など故郷を想う旅情の詠詩もみえる。

「長崎島雑詩」では、唐館内の「観音閣」、「天后宮」（媽祖廟）、「海神廟」、「天風閣」、「松石軒」のほか、「賀蘭館（そうふくじ）」（在唐館前面港中小船式如鞋様）、「大徳寺傍有樟樹一株十囲半畝許」、「崇福寺有梅橋」、「長照寺」（日蓮宗）など、長崎名所を詠う。

「崇福寺」（福州寺）は、近隣の「興福寺」や「福済寺」ともに華僑を檀越とする黄檗宗四福寺の一つで、開山「鉄心」は福建省漳州府の出で、のち広東人の帰依が多かったという（『国史大事典』）。

妓楼では、有名な「花月楼　楼外有朱藤花一株」（疋田屋の築山上の名楼）を歌い、遊女街では「遊女満街扶繖過　濃粧掩映遠山青」（褂は衣笠）、「大笑楼頭沽酔眼」（大笑楼も有名な茶屋）、「舞館歌楼酔幾巡」などと詠う。

長崎港に唐船が進入すれば、「繡嶂舟崖両岸斎　艙面打鑼船泊定」と詠い、長崎のめずらしい年中行事では、「七月十三十四十五等夜、人家在墳墓上懸灯飲酒、灯火之光満山通経」の景観をみて、「満山灯影揺経処、児女上墳笑語多」などと詠う[18]。

②では、詩題「嵜陽詠懐簡諸同人」で「高唱新詩海若驚、才名何幸動公卿（長崎鎮台、曾崇余話）　鴛思求友声相和」と詠い、唐館での詩題「天風閣暁望」（唐館の楼閣）、「瓊浦晩景」（瓊浦は長崎のこと）、「花街間歩」などがみえる。

また「瓊江竹枝詞」（竹枝詞は民間の風俗人情の詠詩）では、「観音閣外石橋斜」（慶安三年建立の福済寺観音堂か）を眺め、美しい女性を「十五雛姫纔破瓜（破瓜は瓜の字がふくむ二つの八で女性の十六歳のこと）、桃腮紅暈瞼生霞（腮はおとがい）、新粧捧出驚人艶」などと詠う。

蔣子賓はしばしば長崎に往来、唐館に滞在しては、長崎の景観や風俗や女性美を詩に詠じていた。蔣子賓は、まちがいなく清商文人だったのである。

2．蒋子賓の亥軒詩文への評語と賛辞

亥軒「菅公画像記」への「蒋子賓曰」評語　つぎに、蒋子賓の『文稿』への評語「清人蒋子賓曰」をみよう。まず「巻之一」の冒頭、さきの「菅公画像記」にみえる。

文末、さきの「安積艮斎先生曰。菅公ノ寃ヲ雪ギ…」および、「磐溪曰、通篇議論、詳明周密…」につづけて、「清人蒋子賓曰」がみえる。さきの「文壇ノ飛将」の語もふくむ

清人蒋子賓曰。僕、貴国ノ史伝ヲ未ダ悉（ことごとく）セズ。敢テ妄リニ臆断ヲ加ルヲセズ。然ルニソノ文法ヲ玩スルニ、議論風生、筆陣縦横、文ニ就テ論ズ。允（まこと）ニ文壇ノ飛将タルニ堪エン。

日本歴史に精通せぬので臆断はひかえるが、文章の作法をみると、議論は風のごとく生じて筆致は縦横、文壇の「飛将」（行動敏速で武勇卓越の良将）たるに値する…、との褒め言葉である。

史実はさておき、亥軒の漢文体そのものへの論評に徹して称賛したことになる。

亥軒「孔子誅少正卯弁」への「蒋子賓曰」　つぎに、さきの亥軒「孔子誅少正卯弁」の「蒋子賓曰」をみる。

まず頭註に、「蒋子賓曰、一語破約。又曰、持論明通、小儒咋舌」、とある。一語で通説を破る持論は明快であり、小儒者を「咋舌」後悔させて口を閉ざしめるものだ、とする。

また、おなじく頭註で「情理中（あた）ル所必ズコレ有ル事、乃（すなわ）チ二千年来竟（つい）ニ一人モ道破スル無シ。今乃チ諸海外ニ得ル。覚エズシテ吾道ノ東スル有ルヲ嘆」ずる、とする。

二千年来だれも喝破し得なかった情理を、いま海外で得るとは、吾が儒教の道が東漸したことに感嘆する次第だ…、というのである。

かなり大仰な賛辞だが、「孔子、少正卯ヲ誅ス」の記述を疑う論に、海外ではじめて出会った感動の賛辞だとすれば、納得できよう[19]。

文末「子賓曰」は、「議論精闘。断制謹厳。経伝ニ羽翼シ、名教ノ功有ルノ文、毎誦一通、輒（すなわち）敬ヲ起シテ止ルヲ観ルニ為ル矣」…。議論は精緻で判断は謹厳、よく経書に典拠し、正しい道徳を指し示す文章は、敬すべき極地にある、と亥軒文章をたたえたのである。

これらの賛辞は、詩文の実態と評語の本音、ひいては、文人交流の実態を、どの程度あらわすものなのか。艮斎

曰、磐渓曰、子賓曰の賛辞をあわせると、四文字で綺麗にととのえた語彙がみえる[20]。

奇警駭人、奇論快論、議論俊偉、議論正大、
議論精闢、議論明快、議論風生、照然明白、
詳明周密、説得明快、断制謹厳、発揮明暢、
文藻雄健、筆陳縦横、明証的確、名義堂々（五十音順）

それぞれ詩文の実態にあわせて工夫した語だとしても、一定度は型式された賛辞、詩文の交流作法の一環としての儀礼的な賛辞の観がある。

蔣子賓の賛辞も、儀礼的な詩文作法に一定度のとったものではあろうが、「吾道ノ東スル」と言わしめた点に、亥軒の考察と文章レベルの高さを読みとるべきであろう。

3．亥軒と蔣子賓をつなぐもの

亥軒の書翰「与蔣子賓書」と「杏士立」　それにしても、亥軒はどのようにして「清人蔣子賓」と知り合ったのか。

『文稿』巻之二に、亥軒と蔣子賓とつながりを示唆する文章「与蔣子賓書」（第六八丁）がある。謙遜の語意にかざられるが、蔣子賓との出会いの部分を読んでみよう（原漢文）。

…僕少クシテ小ク好ミテ書ヲ読ミ、尤モ喜ビテ文ヲ作ル。然シテ夙ニ仕籍（仕官）ニ上リテ賤職ニ従事シ、斯文（儒教の学問）ニ力ヲ専ラニスルヲ得ズ。而シテ齢弱冠（二十歳）ニ及ビテ、東都ニ祇役（勤務）シ、始テ明師良友ト芸文ノ場ニ馳騁スルヲ得ル。但シ稟賦ハ譾劣ニシテ、材質ハ凡陋タリ。師友之教言モ、一ヲ聞テ百ヲ遺ス、自カラ顧テ愧汗ノ趾ヲ被ル。是以テ平生文ヲ作リテモ諸筐笥ニ蔵シ、以テ敢テ世ニ示サズ、世マタ之ヲ知ル者無シ。

再ビ昨年、僕ヲ謬チテ貢士員ニ充ツ。京師ニ到ルヲ得テ、吾郷ノ杏士立ト客舎ニ相遇ス。偶談作文之事ニ及ビ、竊ニ出シテ之ヲ示ス。士立頗ル許可ノ言有リ。乃テ袖ニシテ去リ、西ニ崎陽ニ遊ブ。

遂ニ大雅の高評ヲ辱クシ、忽チ華袞之褒詞ヲ受ク。僕ノ栄マタ大タリ。夫レ大雅学博ニシテ識高。其ノ品隲ノ謹厳、鑑ノ空ノ如ク、衡ノ平ノ如シ。…

私亥軒は、若いころから書を好んで読み、文を作るを最大の喜びとしてきたが、下級藩士として職務に追われるまま、ようやく二十歳台に江戸へ出て明師や良友と出会い、文芸の場に入ることができた…。

しかし才能の無さを恥じ、詩文を書いても箱に入れるのみ…。私の詩文は世のだれも知らぬままだったが、やがて「貢士」に任じられて京に出たとき、同郷の「杏士立」（以下「士立」）と出会った…。

たまたま作文の話になったので、それまで秘していた文章を見せたところ、懇望されたので手渡した…。士立はそれをもって長崎へ遊歴、ついに高貴博学の貴方「蒋子賓」の高評と褒詞を受けることになった…。私の光栄また大なるものがある…、というのである。

亥軒と蒋子賓をむすびつけたのは、慶応四（明治元）年に貢士として京師へ出向したとき、宿舎で出会った同郷人「杏士立」だというのである。

「杏士立」（号一洞また は凡山か）とは何者か。なぜ長崎を訪れたのか。遊学か藩命か。なぜ清人と親しく交わったのか。

「杏士立」と長崎清人「蒋子賓」　「杏士立」、字士立、通称敏次郎、号凡山。富山藩の下級藩士「杏守右衛門」の子。初め大野介堂（富山藩校広徳館教授）に学び、のち昌平黌に入って林述斎や塩谷宕陰に師事、弘化元（天保元一八四四）年に帰藩して文武制度について献策したとされる。

越中「杏氏」（きょう）の開祖は、医師で書家の「橘軒」杏一洞（きょういちどう）（？～一七〇一）。『先祖由緒』［加越能文庫帙115］は、「肥前国長崎村村田右兵衛せがれ」（通詞「西吉兵衛」の子とも）で、延宝八年に富山藩「御医師」として「召出五拾石扶持」で富山城下に赴任、「両親江貳拾人扶持、都合七拾人扶持」として「秘密之薬法」を伝授し相勤めたとする。

また長崎の聖堂祭酒で唐船書物改役であった師「南部草寿」を富山藩儒に推挙したともされる（『三州遺事』）。富山藩の医学～儒学に長崎系を根付かせた元祖らしい。

越中移住後も代々、若年期の遊歴でかならず長崎を訪れていたらしく、長崎村田氏とのつながりは親密であった。一洞の跡目も、はじめ長崎村田一族から養子「林子」を得ている。

まもなく実子「杏三折景高」（一六八一～一七四〇）が生まれて二代目「御医師」を嗣ぐと、「林子」も二十人扶持で「御医師」の新役を得た。三折は享保一四年、「銀子拾両」も加給され、「御書物預」も勤めた。以降代々、医師と書物役を兼ねることになる。

身分は下層のままで、六代目父「景直」も弐拾人扶持の「御手廻組足軽」だが、弘化二年「新番頭学校奉行」の任命で「御役料百石」を得た。

文久元年の死去で七代目を嗣いだ繁次郎士立は、「文学心懸出精」しつづけ、文久四年に藩校「広徳館」の祭酒と藩主御師範役で「新知百石」を得、「寄合御馬廻」に昇進、金沢移住を命じられた。

同年四月、繁次郎士立は、「長崎表より西国筋江為御内用罷越」で遊歴に出て、帰藩ののち藩校「教授加人」と「瀧之間月次講釈」を勤めた。明治二年には「御家禄編輯方頭」に任命されている。

「御内用」の中身は不明だが、長崎は杏氏の先祖由緒の地であり、長崎医家たちも先祖縁戚の仕事仲間であった。亥軒のいう杏士立「西ニ崎陽ニ遊ブ」は、先祖由緒地を訪問、先祖仕事仲間と再会する旅でもあった。

長崎遊歴の杏士立が「清人蔣子賓」と親しく交際したのは、永年の先祖由緒によるごく自然のことだったにちがいない。

すでに「蔣子賓」は、十年間にわたり長崎へ往復していた。先祖唐人由緒の長崎医家文人や通詞文人らとも親交深かったはずである。かれらを通して杏士立は子賓と知り合った…、携帯していた亥軒の文章を見せた…、感服した子賓が亥軒に書を送った…。何回かの書翰往復があった…。こうしたなかで、「蔣子賓曰」四編が亥軒にもたらされた…。そう考えられる。

ただし、亥軒のいう杏士立「西ニ崎陽ニ遊ブ」がいつからいつまでだったか、蔣子賓とどのように出会っていたか、などは未詳で、蔣子賓の詩集にもみえない。

岡本監輔とのかかわり　さきの『⑦行状』（石崎謙 明治三四年）は、「清人蔣鴻、瓊浦ニ流寓シ…」につづけて、「乙亥歳（明治八年）、岡本監輔、清国ニ游シ、先生ノ諸体ヲ往キテ齎（もたら）ス。彼土ノ名儒、薛慰農（つづら家で農を愉しむ隠者）ノ輩、迫リテ唐音ニ似ルト為スト謂ウ」とある。

「岡本監輔」なる人物が、亥軒の詩文を清国にもたらし、清国の名儒や農村の隠者たちが「唐音ニ似ル」とほめたたえた、というのだが、「岡本監輔」とは何者か、亥軒とどうかかわるのか。

明治期に清国を遊歴した「岡本監輔」ならば、北方の「探検家」（『日本人名大辞典』）と目される「岡本監輔」（一八三九～一九〇四年）がいる。亥軒より廿歳以上若い。さらに若い東洋学の「内藤湖南」撰文（大正元年）の墓誌ものこる（『湖南全集』巻十四）[21]。

青年期に、北方とくに樺太の領土化の必要に目覚めて幕府に請願し、慶応元年に樺太探検で一巡、移民の促進

を上書した。慶応三〜四（明治元）年には京に入り、尊攘派志士や新政府要人に樺太開発を請願、太政官から箱館裁判所の権判事（総督「清水谷公考」）に任命される。

おなじころ亥軒は加賀藩「貢士」として在京、公家や諸藩貢士らとしきりに接触している。岡本監輔と出会う可能性はきわめて高い（後述）。

ついで明治三年二月、岡本は「樺太開拓使判官」に任命され、「農工三百人」を募って移民の促進をすすめた。政府は、ロシア植民経営の進出急なるに抗しきれず、外務卿「副島種臣」のもと翌年一〇月、樺太開拓使を一年のみで廃止、岡本らも余儀なく樺太を撤退し引退した。

引退後は、一転してアジア主義へ傾倒、清国や韓国への支援に没頭する（後述）。清国遊歴は明治八乙亥年、および翌九〜十〇年の二回、台湾総督府国語学校講師や、徳島中学校校長など教職を歴任した。

晩年ふたたび北方に転じ、「千島」の開拓を志して「跋渉荒裔」したが意得ずして帰国、「既ニ老窮、且ツ病ニ会い、まもなく没した（「明治卅七年十一月九日卒」墓誌）。

著作も多く、既刊三〇点余のほか、未刊の詩集や経書解釈書など、二〇点をかぞえる（国会図書館・徳島県立図書館）。北方論や探検物、亜細亜論や儒学論、国学論や教育勅語論、ほか耶蘇論一冊もふくめ、明治的な儒学と国粋主義、およびアジア主義におよぶ。

出身の徳島県では、「郷土の偉人」として、「苦学力行・気宇遠大、その生涯を開拓精神でつらぬいた異色人物」で、著作中に「新中国誕生の機縁をなしたものもある…」などとする（徳島県美馬市役所「郷土の偉人―樺太開拓の志士―岡本監輔（葦庵）」）。

岡本のアジア主義とのかかわりは、狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察」の「第六章　善隣協会について―岡本監輔のばあい―」（「東亜」二〇〇二年霞山会　早大図書館サカ―0322）がくわしい。

一八九九（明治三二）年秋に訪中した若き「湖南」内藤虎次郎と、天津の開明派知識人「陳錦濤・蔣国亮」らとの会談では、「近日の万国史記、支那通史の如き、中国人此書を買ふ者甚だ多し」なので、こうした啓蒙書の漢訳をもっとすすめてほしいとの要請に、内藤は「現に設けて善隣訳書館あり、吾妻某氏、岡本監輔翁等と、方（まさ）に翻訳に従事す」として、「万国史記、即ち岡本翁の著、支那通史は那珂通世氏の著、二君僕皆之を識る」と応答した、とされる。

さきの「新中国誕生の機縁をなした」とされる著作は、明治一二年刊『万国史記』の漢訳書のことであったか。

岡本監輔のアジア主義は、「善隣訳書館」（のち「善隣協会」に改名）で日本の啓蒙書の漢訳出版を中心に、教育や医療をあわせる文化的なものだったらしい。のちの国粋的な大陸浪人風が主流をなす状況とは異なる。

まさに「初期アジア主義」（狭間論文の標題）とよぶべき動きであろう。

亥軒の北方領土への関心　そうだとして、亥軒と岡本監輔ともむすび共通の関心事はなにか。亥軒の蝦夷地への関心のふかさに照らせば、北方問題そのものにほかなるまい。

冒頭の④『永山亥軒上書』（別稿予定）の九点の中に、〈2〉「蝦夷地之像ニ付見込書　安政二年十一月」（以下「上書」）がある。標題右に、「応幕臣箱館奉行堀織部正江差出候」と添書する。

安政二年は、前年の日米和親条約による下田・箱館開港への対処として二月、松前藩に全蝦夷地を上知させ幕府直轄とした年である。前月一四日の旗本諸藩士庶民の蝦夷地開拓許可令がらみで、箱館奉行からなんらか各藩へ諮問があっての上書であろうか。亥軒四〇才前後、積極的に「学事厚心懸致出精」していた時期にあたる（「欽定四経」の「御用手伝」任命がその翌年）。

上書は、箱館開港など北方情勢の急変を案じながら、「古書ハ蝦夷之千島ハ申ニ不及、カムサスカ迄も我之領域御座候所」としながら、ロシアの進出が急であることを警告、本土からの移民や産業・商業の開発、夷人教化、学校建設（「士人御取立」「塾師」など）などの対抗策をとるべきだとする。

これら蝦夷地や北方地に関心強かった亥軒が、なんらか「北方探検家」として動く岡本監輔に接触をはかった可能性は高い。接触の時期は、さきの双方の在京がかさなる慶応四（明治元）年であろう。慣習的に詩文も交歓していたとすれば、さきの「乙亥（明治八年）歳、…清国ニ游シ、先生ノ諸体ヲ往キテ齎（もたら）ス」の記述に合致してくる。

いずれにせよ、亥軒文章は、杏士立と蔣子賓、亥軒と岡本監輔の複数ルートで渡清し、清人からそれなりの高い評価を得たことになる。

蔣子賓に呈した師友の詩文集　「与蔣子賓書」には、本文につづけて「与蔣子賓書　再啓」（以下「再啓」）と「与蔣子賓書別紙」がつく。

「再啓」で亥軒は、「僕友人ニ山田子昭有リ。性、詩ヲ

作ルヲ嗜ミ、ソノ草本ハ僕ニ囑ス。高明（子賓への敬称）ハ是正ヲ乞ウ。瀏覧（目を通す）ノ余ニ教言ヲ賜ウコト、是レ祈ス」とし、子昭の詩の是正を子賓に乞うている。

山田子昭（一八二七～一九〇五）は、名は宣、字子昭、通称東平、号新川。代々越中の漢方医で藩校明倫堂でも教授、明治期は東京で漢詩結社「正葩吟社」を主宰したという。

『亥軒詩稿』には「贈山田新川」、『文稿』には「山田子昭　西遊紀行詩序」と「送山田子昭帰越中序」がのこる。『明治卅八家絶句』（明治四年刊）所収の亥軒詩にも、「山田子昭来訪席上賦贈」と「謝山田新川評定拙詩」がみえる。亥軒との共編漢詩集、『連珠合璧』（明治十一年序、同十二年刊）ものこる。亥軒「椿園詩鈔」と子昭「新川詩鈔」の合冊で、亥軒詩に「贈山田子昭」もみえる。

亥軒とはきわめて親しかったらしく、詩文交歓では、もっとも数が多い。子昭は亥軒より十二才若いが、作詩では「評定」を願い、「評定」を謝するような先輩格だったらしい。

いずれにせよ亥軒は、先輩格の山田子昭詩を蔣子賓に呈し、さらなる「是正」を乞うことになる。亥軒の子昭との親密さと、蔣子賓への崇敬振りの大きさをうかがわせる。

さらにつづく「与蔣子賓書　別紙」（以下「別紙」）では、師安積艮斎『艮斎文略』（以下『文略』）への「論定」を乞うている。

安積思順ハ艮斎ト号シ己未歳（安政六年）物故学問渕博。著書亦数種有リ。其中艮斎文略。則チ已ニ印刻シテ世ニ行ル。高明ノ目ニ寓スルヲ得ルヤ否ヤ。文略中、武王ノ箕子ヲ封ズルヲ弁ジ、檀弓ヲ読ムノ諸篇ノ如ク、考據精確。僕輩、常ニ推服ス。但シ貴邦諸賢ノ論定ヲ得ルヲ欲ス。高明見ル所如何。敢テ問ウ。

亥軒は、みずから感服した師艮斎の武王箕子処遇論や檀弓論（『礼記』「檀弓」カ）の文章に、蔣子賓はじめ清国諸賢の高評を求めたのである。

とくに『礼記』「檀弓下」の「苛政ハ虎ヨリ猛シ」は、艮斎が好んだ章句である。門下で、信州中野代官所の手付でもある「大塚揆」に書きあたえた「題二画虎図一応二大塚素軒之索一」（『艮斎詩略』）でも、引用している[22]。

こうした艮斎の諸論に、蔣子賓はじめ「清国諸賢」がどのような評語を述べたか。直接の記録はみえず確認はできないが、亥軒の師艮斎への敬意のふかさと、清人の評語への尊重振りがうかがえる。

おわりに

ここまで、「藩士文人」なるあらたな範疇[23]をたて、加賀藩下級藩士でも最下層の足軽文人、「亥軒」永山平太の書き物と文人交流をみてきた。

似たテーマとして以前、「藩士俳人」として、中層の岡山藩士「兀峰」桜井武右衛門の活動をみたことがある。永年みてきた「在村文化」の視点に依拠し、藩士俳人の在村交流を中心にとりあげた。のこされた史料が俳諧のみで、「藩士俳人」としたが、亥軒とおなじ範疇「藩士文人」にふくまれる。

今回は、在村文化の視点もはなれ、藩士文人だけの交流をみるにとどまったが、在村文人との共通点がある。歴史研究で忘れられがちな、いわゆる無名の人びとの「供養」と「復権」である。

無名人をとりあげることで、あらたな実態もみえてくる。歴史研究に、あらたな知見を加えることにもなる。

今後も、在村文化の視点に、あらたな範疇と視点もあわせ、より多くの無名の人びとの、知られざる歴史実態を見ていきたい。

（二〇一一年一〇月一八日）

【注】

(1)「亥軒」永山平太の調べは、「次女れん」の嫁ぎ先「旧戸長加藤大作」の子孫の縁戚から頼まれた縁で史料を見はじめた。特別の藩活動やすぐれた書き物があるわけではない。文字とおり一介の下層藩士文人だが、その書き物と文人交流と諸活動をとおして幕末維新期なるものを見直し、供養と復権をこころみたい。なお処刑者として「小川幸三」（村医師の子で藩士取り立て京葬の士）がいるが亥軒はふれていない。小川幸三については『加賀藩史料』「小川幸三尽忠録」、宮澤誠一「加賀藩尊攘運動と安政の米騒動―一「草莽」の行動の分析を通じて」がくわしい（『維新変革における在村的諸潮流』鹿野政直・高木俊輔編一九七二年三一書房）。

(2)「文久中、藩主斉泰京師に朝覲し、亥軒此に従ふ」は、藩主名代の「世子慶寧京師に朝覲し、亥軒此に従ふ」の誤記（加賀藩史料）。『墓誌』『郷史』はほかにも誤記が少なくない（後述）。なお「⑥行状」は、在京中「先生托学和歌執贄三位高松公」とするが、「高松保実」（明治十一年歿）のことか。

(3)「会々（たまたま）讒せられ」について、「⑥行状」は、同僚「鶴見陸」とともに三箇条の上書（一開長崎箱館、二禁闕守護加賀薩摩交替、三列藩封土増減）を呈したが「二条右府（一条斉敬一八一六～七八ヵ）…、深忌二人方、遂禁出寺門（藩宿舎建仁寺）、四月帰藩、与陸共蒙譴塗敷」など、二人の召還と蟄居処

分が「二条右府」の讒言によるものだったとする。

(4) おなじく「⑥行状」は、「先是頼山陽所修日本外史未上梓、先生手謄全部、加評語一一中肯綮(急所)、其邃于史学可推知矣」など史学にも堪能だったとする。また天保飢饉期に「穀価踊貴、先生著農政論三篇、備甚(根)救荒之策」とするがこの二書も、評語入り『日本外史』手謄本の所在等も未詳。

(5) 亥軒父「岸平馬」の実家「岸家」は、亥軒の二男三女のうち長子「秀実」が岸家を嗣ぎ(石川県収税属)、のち秀実の子「鉄太郎」が永山家を嗣ぐ。亥軒の遺した史料は、後出の「岸文庫」として近世史料館に保存される。

なお養子先「聞番組足軽 永山市次郎」の「聞番」は、一般に「留守居」にあたる「聞役」と混同され「幕府との連絡役を勤める藩の役人…」などとされるが、加賀藩では「聞番弓組足軽一五人」のような最下層の足軽で、洪水時の河川巡回など村廻りもつとめる(「近世越中国のお話」ettyuutoyama.ettyuutoyama.seesaa.net/2004)。

(6) 以上の劉子や池田草庵および「折衷独学実践派」については、同傾向の上州渋川の「吉田芝渓」もあわせ、拙著『近世の地域と在村文化』および『近世の在村文化と書物出版』(吉川弘文館20100年、2001年)参照。

(7) 大槻磐渓は大槻玄沢の子。嘉永二年のイギリス艦隊侵入の沿岸測量にはロシアと提携して対抗すべきを説いて『献芹微衷』を著し(同名同趣旨の松本斗機蔵書あり)、ペリー来航時には開港論の上書を呈したとして知られる。第三子は『大言海』で知られる国語学者「大槻文彦」。

(8) 高幡不動「明王院金剛寺」境内。元会津藩「松平容保」篆額、松本良順書、明治九年発願、明治二十一年竣工。撰文の佐幕系心情等は拙著二〇〇九年参照。

(9) 讃岐国の人。晩年の号「迪斎」。江戸昌平黌へ入り林家都講「佐藤一斎」にみいだされ天保五年に養子(河田姓のまま)、同十二年林述斎死後、一斎に代わり都講。安政元(一八五四)年ペリー再来航で大学頭「林復斎」の随員として書記と訳文にあたる(『墨夷応接録』六巻あり(『大日本古文書』幕末外国関係文書附録1~7))。

(10) この傍点部の原文「且出二其所一自製一勧学歌者一」は、句点ほかに誤植があるか。仮に「且ツ其自製スル所ヲ出シテ学歌者ニ勧メ」と読み下した。

(11) 古音、五~六世紀渡来の呉音以前の古い字音で、万葉仮名などに反映されたとする。

(12) 「(原文)贈二永山生一/学之要。在レ得二其方一。学而得二其方一。則糟粕塵埃。皆足三以開二其知一。学而不レ得二其方一。則経伝史子。反足三以蔽二其知一。泰西之俗。長二於物理一。取以爲レ資。豈無レ益哉。今世学者。口誦二格致之説一。而動輒自外二於泰西物理之学一。是学而不レ得二其方一也。宜乎。

其知之蔽。而其識之陋也。金澤永山生。有二文才一好レ学。相識雖レ末レ久。而其信レ予甚篤。故因二其一レ言。遂書以勉レ之。（訓点は全集本のまま）

(13) 象山の閉門蟄居はペリー艦隊来航時の吉田松陰密航の連座で嘉永七（一八五四）年。亥軒の「栄擢」が後述の「欽定四経／加賀国学蔵版」の編纂役入りだとすると、編纂は天保十三年（一八四二）で十年余前。少なくとも十年余さかのぼることになるが、亥軒の記憶では、①自身の帰郷で別れたまま、②象山蟄居で再会できぬまま、③暗殺で死去した、という順になり、こうした記述になったのであろう。

(14) 象山和歌は和語ゆえか文中には入れてない。『象山全集』でも確定できない。「橘元輔」は橘守部の養子「橘冬照」（幸手出身）の別名。『橘守部家集』（嘉永七年跋）の編と蔵版にみえ、国学者・歌人として著作もある。

(15) 用例に韓愈「岳陽楼詩」の「軒然大波起、宇宙隘而妨、魏峨拔嵩華、騰掉較健壯」ほかが検索できる。

(16) 「滬呉（ごご）」は篁所の滞在した上海と蘇州の古名によるという。岡田篁所（一八二一～一九〇三）は長崎生まれの医師、名穆、字清風、通称恒庵で、大坂で宇津木静区に師事し、多紀氏に医術を学んだとされる。その医学交流については、梁永宣・真柳誠「岡田篁所と清末の日中医学交流史料」（『日本医史学雑誌』五一巻一号）がくわしい。

(17) 「清商文人」については拙著『近世の在村文化と書物出版』（吉川弘文館二〇〇九年）参照。陳捷氏からのちの『滬呉（ごご）日記』の記述により、科挙で「進士」に合格していると教示された。記して謝する。

(18) 江戸初頭キリシタン禁令の強化のもと嫌疑をのがれるべく、長崎では盆行事を派手におこなうようになったといわれるが、その実態が、墳墓に灯を懸げて酒を飲み、児女ともに一族が談笑する姿だったことがわかる。清人の目で詠われ、はじめて実態がみえてきた（拙著二〇〇九年）。

(19) はじめてか否か。「孔子、少正卯ヲ誅ス」をめぐる中国儒学史のあり方の確認が必要だが、ここでは深入りはしない。

(20) 経書あるいは日常文にみえる語も一部あるが、多くは各自が「曰（いあん）」で工夫した語であろう。

(21) 「岡本韋菴先生、初名文平、後改監輔。天保十年生、明治卅七年十一月九日卒。先生一生、以籌北邊爲志。弱冠駕夷艇、窮探樺太北徼、前人未到之地。王政維新徴用、綜辦北事。既廷議棄樺太、先生竟絶意。用世累任教職年五十餘。復辭職欲拓千島、跋渉荒裔。不得意而歸。既老窮且病會。王師伐露、先生欣然忘疾之在躯。斯役也復樺太之南半、而先生不及睹矣。迄疾篤特旨敍正五位、盖録前勞也。先生嘗游禹域訪、聖裔於闕里。平生著述等、身

往往傳誦海外云。／大正元年十一月　文學博士内藤虎次郎製文并書」。

(22)「手付文人」大塚揆、名は揆、字は子潤、俗称は庚作、号「素軒」。文政十年「手付手代教諭書」（『長野県史』）の筆頭署名に「信州中野陣屋　大原四郎右衛門　手附　大塚庚作」とある。艮斎は、猛虎の図柄を詠いながら「…君見ズヤ、苛政ハ虎ヨリ猛シク、編氓四散シテ田畝荒ル」（『原漢文』）とむすぶ。代官手代でもある大塚揆に、「苛政」に走らぬよう訓告したものである。拙著2009『近世の在村文化と書物出版』（吉川弘文館）

(23)これまで「藩士文人」のほか「範疇」としての「在村文人」について、社会経済的な実態ごとに、蚕種商文人、豪農商文人、大地主文人など、社会的存在をあわせた「呼称」を付けてきた。

文人のほとんどは、一身で風雅と生業を担う「業雅一体」で活動し、「小林一茶」のように生業をはなれた純粋な「俳人」や「文人」はまれである。したがって俳諧をたしなむ農豪農商文人を、ただ「俳人」とするような辞書的表現では、社会的実態がみえない。

また「業雅一体」は、城下の町人「御用商家文人」でもおなじだが、実務は弟や番頭手代にまかせて文化活動に専念しながら、もっぱら武家との御用関係を、風雅交流もふくめ円滑にとりもつ「トップ」の役割をになう（企業のトップが業界や政財界との関係をとりもつように）。

たとえば大坂の「木村蒹葭堂」は、辞書的表現では「雑学者」「本草家」「文人」などとされるが、社会的実態をあわせれば「酒造家文人」、範疇では「御用商家文人」というべきである。なんらか御用関係を乱すと、蟄居や追放処分もおこり得るが、業雅一体の「業」の方の「社会的存在」としての処分であり、「雑学者」「本草家」「文人」として処分されたわけではない。

拙著2009では、その都度「呼称」か「範疇」かの区別を示さなかったので、「範疇」が多すぎるとの批判もあった。「範疇」は「呼称」を内包するもので、蚕種商文人、豪農商文人、大地主文人などは、社会的存在を併示した「呼称」であり、「範疇」としては「在村文人」となる。

ほか範疇としてこれまで、「代官所文人」（実態呼称では代官文人、手代文人、手付文人…）もみてきた。今後は「範疇」か「実態呼称」か、明記を心がけたい。ここでの永山亥軒は、範疇としては「藩士文人」、実態呼称としては「足軽文人」となる。